

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

アジア読本モンゴル

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小長谷, 有紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4582

まなざし

遊牧世界の論理

小長谷有紀

●遊牧における移動の論理

一般に遊牧とは、家畜の群れを放牧し、その放牧地を季節的に移動させる牧畜をいう。それは生業様式であるにとどまらず、生活様式でもある。人びとは生活の舞台を家畜とともに移すのである。

この移動性ゆえに、もっぱら放浪的であると受けとめられ、遅れた生活として理解されがちであった。また土地への継続的な投資を重視する農業と比べて、きわめて粗放的な生業として理解されてきた。しかし、その移動は決して水や草を求めてあてどなくさまようものではない。

そもそも遊牧の対象となる家畜は生来、群れをなして移動する動物である。したがって、家畜にとって移動とは快適さの提供にもなっている。

草丈はあるが水飲み場のないという場所でも、冬にな

れば雪を利用して放牧地となりうる。植生に恵まれた地域でもできるだけ移動し、また種子の実る秋にこそ頻繁に移動して、家畜に十分な栄養をとらせようとする。すなわち、遊牧とはまさに移動によって土地利用の高度化をはかるものである。

乾燥気候という一種のマージナルな環境のもとでは、単に日常的に乾燥しているばかりでなく、変動がかなり著しい。そうした変動に柔軟に対処するうえで、移動は最大の効果を発揮する。ゾドとよばれる雪害やガンとよばれる干害には、避難が一番というわけである。もちろん、政治変動という社会的災害にも逃避行は有効である。所与の自然環境に適応した生活を確立するうえで、移動はきわめて重要な役割をになってきた。

●家畜に依存する生活

半世紀も前に中国の内モンゴル草原を調査した今西錦

司や梅棹忠夫は、「遊牧論」を展開した。遊牧の起源について、場所や時代を問わずに、移動のメカニズムを考察した。そして、群れをなして移動する性格をもった動物たちに対して、人間の方が過度に適応することによって、遊牧がなりたっていると指摘した。

たしかに、「過適応」するに値いするほど、それらの動物たちは生活のためのさまざまな資材を提供してくれる。とりわけ基礎的に重要なのは、ヒツジであろう。

ヒツジの群れはいつでも食べたいときに食べることでできる、いわば生きた冷蔵庫である。乳をしぼれば、その数を減らすことなく食材を確保することもできる。

ほふったときに副産物として生じる毛皮は、暖かい衣料を提供してくれる。毛だけをむしりとれば、やはりその数を減らすことなく毛を確保することもできる。毛はつむいで糸にもなるし、たたきかためてフェルトにもなる。このフェルトが住居としての覆いや敷物を提供してくれるのである。

また糞さえもが燃料として使いうる。

このように、有用性の高い動物を家畜として手元にとどめて移動することによって、生活の基盤を確保してい

るのが、遊牧の暮らしである。モンゴルでは人口のおよそ半分が、こうした遊牧の暮らしを維持している。環境に適応した生活様式を高度に実現させて、家畜と共生している。

●五つの家畜

モンゴルで遊牧の対象となるのは五種類の家畜すなわちヒツジ、ヤギ、ウマ、ウシ（ヤクも含む）、ラクダである。もちろん地域に応じて分布は均しくはないものの、複合的な家畜の構成が理想とされている。

ヒツジからは肉、乳、毛、毛皮を得る。ヤギはヒツジの群れのなかにあつて、先導役に似た役割を果たす。また雪害に遭遇して家畜数が激減した際には、その繁殖率の高さゆえに家畜資本の増加に貢献する。ウシは雪害には弱い、その乳量はヒツジと比べてはるかに多く、栄養豊富な乳製品を提供する。さらに、車を曳かせれば荷物を運んでくれる。ウマにはもちろん騎乗する。夏期になると、搾乳して馬乳酒を楽しむこともできる。雪の多い時には、ウマのあとにヒツジたちを放牧するといわれている。いわばラッセル車のような役割をウマに期待するのである。ラクダは厳寒期、ウシの代わりに車を曳き、

ウマの代わりに人を乗せる。また毛を刈って糸をつむぎ、さらに汎用性の高いひもを得ることもできる。

どの家畜もある特定の目的に特化することなく、多角的に利用できるものである。そのうえで、複数の種類を維持することによって、利用がより一層多角的に広がる。

何か一種類だけが大量にあるよりも、いろいろある方がよい。モンゴルの遊牧は「豊作タイプ」というより、むしろ「万作タイプ」なのである。

●去勢オスの意義

このように各種の家畜を多角的に利用するという面で、実は去勢オスのしめる意義が高い。モンゴルでは家畜の種類を問わず、幼少期にほとんどのオスを去勢する。乗ったり、曳かせたりといった役畜利用は、すべて去勢オスが担当している。騎馬遊牧民の機動力も、去勢されたウマの群れのおかげであった。またヒツジなら、去勢しておいて大きくし、毛や肉の量を増やすことにもなる。

一般にオスは群れを分裂させる傾向をもつが、去勢することによって、殺さずに群れの安定をはかることができる。モンゴルでは、殺さずに維持できるだけの草原がある。一方、殺して売る相手にはあまり恵まれない。こ

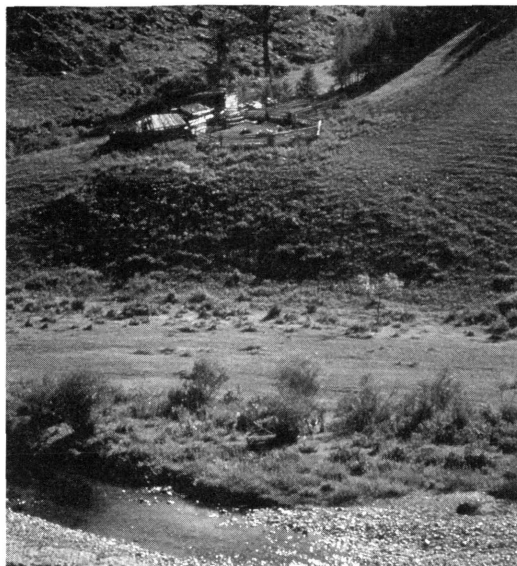
のため、群れのなかで去勢オスの占める割合はおよそ三割にも達している。これは、世界の牧畜システムのなかで、きわめて高い数値である。

モンゴルではオス畜は去勢されて大量に生き残り、量的にも質的にも重要で、「去勢オス畜文化」ともいうべき特徴を形作っているのである。

●移動の特色

移動の面では、冬期に山をのぼるといふ特徴が見受けられる。一般に、夏は山をのぼって涼しい草原で過ごし、冬には寒くなるので山をくだると考えられがちであろう。たしかに、モンゴル国の西部に横たわるアルタイ山麓などでは基本的に秋には山をおりる。しかし、大半の地域では、必ずしも冬に高度をさげるわけではない。厳しい北西風の寒気を避けるために、山や丘の裾を少し這いあがり、懐にこもるようにして暮らす。そのため、高度はむしろあがっていることも多い。北西風を避けることのできるような地形であれば、非常に高度の高いところでも冬営地が設けられる。砂の多い窪地があれば、そこもまた冬営地となりやすい。

このように、冬に高度をあげる場合も多いという移動



山中の冬营地。



オトルとよばれる移動。

の特色は、モンゴルの寒気の厳しさを物語っている。

植生の恵まれた地域や、豊かな季節ほど頻繁に移動するという特徴も、おそらく一般常識と相反するにちがいない。モンゴル語でオトルとよばれる移動が、そうした特徴をよくあらわしている。

オトルとは、夏营地や冬营地といった季節的な宿营地

のあいだの移動に加えて、さらに別途移動するという分派的移動である。宿营地ではゲルとよばれる天幕を設置するのに対して、オトルの場合はマイハンとよばれる、ずっと簡素なテントを張る。たいてい男たちだけで家畜の一部を連れて移動する。搾乳用の家畜などは宿营地に残し、主として去勢オス畜などを連れてゆく。雪害や干

害などから避難する場合にもオトルで移動する。

オトルという移動によって土地利用の高度化をはかり、また環境の変化にも柔軟に対処するのである。まさにオトルは遊牧移動の本質を示しているといえよう。

●社会主義時代の変容

モンゴルの近代化は、同時に社会主義化でもあった。

社会主義国の経済ブロックのなかで分業体制がとられ、モンゴルにはもっぱら銅やモリブデンなどの鉱産資源を供出したたり、畜産物を供出するという役割があたえられた。たとえば、隣接するカザフ共和国やトゥワ共和国、ブリヤート共和国、中国内蒙古自治区に比べてみても、モンゴルでは都市部におけるインフラの設備が不十分であり、草原部における農耕化の割合も少ない。コメコン（経済相互援助会議）分業体制のもとで社会投資が遅れたため、モンゴルでは遊牧が生き残る結果となった。

それでも、まったく過去のままの遊牧生活が変わらずに続いたわけではない。社会主義化にもなり変容をとっている。

社会主義体制下にあったモンゴルでは、ソ連のコルホーズに対応して、牧業の集団化がはかられた。

もともと人びとは家畜の群れを統合して放牧するなど、の協力態勢をとるために、通常いくつかの家族が集まって宿営してきた。こうした宿营地集団をモンゴル語でホト・アイルとよぶ。親族関係に基づいたり、富裕な戸と貧困な戸が組み合わさったりする。家畜が多いのに人手は少ない家と、人手があっても家畜の少ない家が随時、協力しあうのである。したがって、こうした宿营地集団は必ずしも固定的ではなく、自由な連合体であった。

この伝統を社会主義的集団化が変えてゆく。一九二〇年代にはもっぱら富裕な貴族や寺院の家畜を没収して共有財産とし、一九五〇年代には一般の人びとの家畜を供出させ、一部の私有のみが認められた。人びとはソールとよばれる単位（生産隊）で宿营地を一つにし、それらが集まってヘセグ（班）となり、さらにブリガード（生産大隊）を構成し、さらにそれらが集まってネグデルとよばれる牧業組合に再編された。そして、ネグデル組合の家畜を分担し、ノルマの達成度に応じて給料が支払われるようになった。

家畜は、一歳の子ヒツジばかりとか種オスヒツジばかりといったきわめて等質的な群れに分解されて組合員に



ラクダによる移動。



牛車での移動。



ヤクによる移動。

割り当てられたという。それは、万作タイプで生きてきた牧民にとって、同じ遊牧とはいっても理想からほど遠いものであったに違いない。

ソリーリとは定住化を意味するソリーシラハというモンゴル語と語源を一つにする単語である。このことから

明らかなように、社会主義的集団化方針は、理論的には定着化方針でもあった。ホト・アイルと違って、ソリーリとよばれる宿营地集団は自由に変更ができるわけではない。下営する場所も決められ、移動の日時やルートも決定どおりに実行しなければならなくなった。遊牧に不可

欠かさずさまざまなフレキシビリティに対して、規制が加えられたといつてよいであろう。

遊牧の移動範囲を縮小して定着化することによって、医療や教育、娯楽といった各種施設の利用が促進するとされた。また、草刈場を設定して共同で干し草を用意したり、囲いや屋根のある固定的施設を建設して春营地とすることによって、遊牧の生産性が向上するとされた。

しかし、使いたくない井戸を命令どおり掘らなければならぬということもあつたし、規定どおりの移動に忠実に従つたために、かえつて雪害の被害が大きいかもあつた。

これまでの公式見解が数値で示してきた生活や生産の向上について、いまようやく再検討されるべき時をむかえている。人びとのあいだで実際に何がどのようになつておこなわれたかといった検証作業はこれからの課題である。

●変わりゆく遊牧生活

民主化の流れを受けて一九九〇年代に入ると、ネグデル牧業組合の民営化が決行され、家畜は私有分配された。これに対し、人びとはこれまでの共同態勢を維持し、ほとんどのネグデルがそのまま株式会社に移行したようである。新たな集団化の時代をむかえたのである。

民営化されれば、命令されたノルマに応じるのではなく、自分たちで意欲的に目標を定めていくことになる。しかし、ここに流通の欠如という大きな障害が横たわっている。

かつては、ネグデル牧業組合に対して家畜供出が義務づけられ、それらは集められてもっぱら首都ウランバートルへ向けて出荷された。代表者が家畜を放牧しながら追つていった。それが都市と草原をつなぐ流通パイプであり、納税システムでもあつた。また、担当者にとっては年に一度のいわば上京であり、一種の娯楽でもあつたろう。ところが、民営化とともにこうしたシステムがほとんど失われると、都市と草原が断絶してしまふ。個人レベルで故郷からヒツジ肉を調達することはあつても、システムとして需要と供給が十分に連結されているとはいえない。

国家の経済再建政策は、どうしても人口が集中する都市を重視しがちである。都市と断絶された草原世界が克服すべき課題は、大きいといわざるをえない。

●分散型文明への道

首都ウランバートルから離れば離れるほど、各地で

電線や電話線が切れているのに補修もされなのまま放置されている。広大な地域に人びとが散在して成り立っている遊牧社会にとって、そもそも電線やパイプラインを引くようなインフラの設備はきわめて非効率的であつたらう。

しかし、現在はもはや、太陽電池やパラソラアンテナや携帯電話の時代である。こうした今日の技術は、いずれも分散型であるという特徴をもっている。必ずしも集中していることで効率があがるわけではない。集積型技術ではいかにも不利だったモンゴルだが、これからの分散型技術はまさにモンゴル向きであるように思われる。最先端技術に向いている遊牧生活であるからこそ、伝統を守りながら「分散型文明」を発展させることもできるにちがいない。

農耕こそが収量も多く、高度な土地利用だと信じられているかぎり、いかにも不利なモンゴルではあるが、乾燥地域における無理な農耕化によって環境破壊が明らかとなっている今日では、それぞれの大地に何がふさわしいかを選択して発展させてゆかなければなるまい。

これまで、文化 (culture) の概念は農耕 (cultivate) か

ら生まれ、文明 (civilization) の概念は都市 (city) によって育まれてきた。いずれも、土地に投資して集積的な利益を生み出すことに価値を認める概念である。そして、その現在の終着点である現代文明はゆきづまりを見せながら、「環境」や「共生」をキーワードとする思想的潮流の中にある。

みずから移動することによって「環境」に対する負荷をできるだけ小さくして適応し、家畜を維持することによって「共生」してきた遊牧の暮らしは、実は現代文明の最先端というべきなのかもしれない。少なくとも、農耕から文化を、都市から文明を概念化してきた人類のあり方を逆照射する世界がここにある。



牧畜業の盛衰

松田忠徳

ヒツジ、ヤギ、ウシ、ウマ、ラク

ダ等、モンゴルで飼育されている家畜の総数は、一九九〇年の民主化当時で人間の一〇倍以上の約二五八〇万頭。毎年、九〇〇万頭が新たに生まれ、そのうち六〇〇万頭が食用用に回される一方で、三〇〇万頭は寒さや病気のため死ぬ。

現在は食糧不足のためほとんど輸出していないが、以前は缶詰にして、コメコン諸国にずいぶん輸出されていた。食用用に回される六〇〇万頭の中に、こうした輸出用の缶詰も含まれていた。その量は正式には公表されていないが、年間二〇〇万から五〇〇万頭もの家畜が輸出されている。

ただろうといわれている。

だが、社会主義時代、基幹産業であるこの牧畜業は不振のままで、ついに第二次世界大戦前にもっとも家畜の多かった一九四〇年の約二六〇〇万頭の水準まで回復することはできなかつた。民主化直前の一九八九年には数字のうえでは二四七〇万頭まで、徐々にではあるが回復してきてはいた。

しかし、この間、人口が三倍近くにふえていることを考えると、実質的には大幅減である。その主な原因に過度の食肉輸出と集団化があげられる。

モンゴルから食肉輸出が急増した

のは、第二次大戦でドイツと戦ったソ連に対する支援がきっかけだった。過度の政府調達が拡大再生産を阻害してきたといわれている。数を確保するために、雌までもが供出されていたというのだ。

一九五三年に始まった第二次五カ年計画で、モンゴルの社会主義建設および農牧業の集団化が開始され、三カ年計画（一九五八―六〇年）で、その目標がほぼ達成された。この時点で、遊牧民の九七・七%が協同組合（ネグデル）に加入したという。

ただ、この集団化は簡単なものではなかつた。古来営々と続けられてきた遊牧形態の牧畜業を、ソ連式の

種類	1985年	1989年	1991年	1993年	1996年
ラクダ	559	550	476	367	358
ウマ	1,971	2,200	2,260	2,190	2,770
ウシ	2,408	2,693	2,822	2,730	3,476
ヒツジ	13,249	14,265	14,721	13,778	13,561
ヤギ	4,298	4,960	5,250	6,107	9,135
総数	22,485	24,676	25,529	25,172	29,300

家畜頭数（単位：1000頭）

『モンゴル国の経済・社会統計 1996』より

コルホーズへ強引に移行させようとしたため、遊牧民はサボタージュで抵抗したからだ。なかには自分の家畜を屠殺したり、隣接する中国内モン古へ逃亡する者まで出た。その損失は総家畜頭数の三二%にも及んだ。

集団化された遊牧民は、私有家畜を一人当たり、一〇〜一五頭程度認められたほかは、国から家畜を預かり、それを飼育するようになった。

報酬は賃金制。都市の工場労働者と同じで、能力差による私有家畜、私有財産の拡大等は認められなかった。

このように遊牧民の勤労意欲が削がれてきたことが、民主化直前まで半世紀を経ても、一九四〇年の頭数水準まで回復できなかった最大の原因といってもいいだろう。

一九九〇年の民主化後、遊牧民の家畜は私有化されてきた。かつては一家族でせいぜい二〇〇頭程度のヒ

ツジしか飼育できなかったが、民主化後は五〇〇頭、一〇〇〇頭ものヒツジを所有する遊牧民も出てきた。この傾向は今後、ますます拡大するに違いない。

私がヘンタイ県で取材したウマ飼いは、「社会主義時代のノルマは厳しく、体がたがたになつた。今は天国のようなもの」と語っていたのが、印象的だ。もつともこれからは遊牧民の間にも能力差が現れ、貧富の差も当然生じてくるだろう。

家畜の私有化の効果は予想以上に早く数字に出ている。一九九六年には家畜総数が二九三〇万頭と、独立以来最高の水準に達している。

精神が疲れるあの病氣は、どこへ行つたんだらうねえ

バヤンフー

小長谷有紀

●貧乏な子は学校へ

彼女の名前はバヤンフー。一九三二年、申年生まれ。

誕生日は六月二五日ということにしてある。六四歳の彼女の日課は、少し遠い学校までバスで通う孫娘の送り迎え。九歳になる孫娘が一人で通学したいと言ひ張るものだから、彼女はバスの停留所で待ちかまえていて、自宅まで送り届ける。

そばで食事をしている孫娘に「ああ、そんなことして、こぼれる、こぼれる」などとこまめに気を配りながら、自分の人生について、まるで民話を語るようにいきいきと再現してくれた。

生まれたのは、オプス県のツァガンハイルハン・ソム。六人きょうだいの下から二番目だった。一九四四年に父が死んで、翌年にソムの中心地にある学校へ通うようになる。

「豊かだったかだなんて、とんでもない。豊かな家の子

が学校なんか行くもんですか。有力者のいない家の子だの、貧乏な家の子が学校へ行つたもんですよ」

父親の死亡を契機に、彼女は一三歳で学校へ通うようになった。自分より年上の一年生はいくらでもいた。

「ソム（の中心地）には、建物が二つ三つと、いくつかのゲル（天幕）があるばかり。学校では石炭を燃やすから、もうみんな目がまっくらになつちやつて。黒板はあつたけど、ノートも鉛筆もありやしない。包装紙の残りを使って、乾燥インクを水でとかす筆ペンがあつた。四六年にはロシアからいろんな品物が入るようになって、ノートも鉛筆もだんだん増えていったね。それでも貴重だったから、鉛筆はね、ちゃんとひもを通して服のボタンにとめていたのよ。一本だけでしょ、そりゃあもう大切に使つたもんですよ」

一九四九年に優秀な成績で四年生を終了した段階で、ウランバートルへ上京する。テクニコムとよばれる単科

大学に入学するためである。医学学校や獣医学学校もあったが、彼女を選んだのは商業学校であった。

「なあに、一緒にいた女の子が二歳年下だったけど、彼女に従って選んだまでのこと。クラスには一四人くらいいたけど、女子は二人だった」

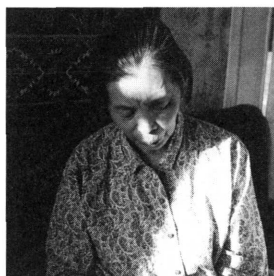
こうして、彼女は同郷の女子学生とともに一七歳で上京し、經理の勉強をはじめたのである。首都に知り合いがいるわけでもなかった彼女は、学生寮で暮らした。

「まあ、軍隊とおなじでしょう。食事つきだし、衣服ももらえる。子ヒツジの毛皮の帽子とか、フェルト製の長靴とか。寮に住まずに、市内の家庭にいる学生には、食費として一二〇トッグルグが与えられた」

「食事ときたら、野菜入りなんだ。キャベツなんてまずいたらありゃしない。なんだってあんなにまずかったんだろ」

一九九五年現在の統計によれば、ウランバートル市の人口はおよそ五十四万人であり、国民の二五%が集中している。彼女が上京した四九年当時、およそ半世紀前にはいったいどのような都会だったのであらうか。

「町で一番高い建物は、第一学校。唯一



バヤンフー。

の一〇年制学校だったね。こんなに背の高いものが世界にあるかと思った。今はもう物陰に隠れてどこにあるんだか見えもしない。あれは四階建てかねえ。今の美術館（ザナバザル記念美術館）が、当時唯一の百貨店でね。あの中で迷子になったもんだよ。娘や孫娘が、バハー、なんとまあ、あんな小さなところで何で迷うもんかと言うけれど、ほんと、そりゃもう迷ったんだよ」

「その百貨店からガンダン寺まではあたり一面、中国人の店だった。道の両わきに店が並ぶ。店と店とのあいだにはいやもう、まったく隙間なんてありゃしない。彼らの店には、売らないものはない。何でもかんでも売られた」

「夏休みに故郷の家に帰るときには、ジスタブという車で、二一日もかかったことがある。道は悪いし、運転手は寄り道するし、家畜のように運ばれたもんだ。今なら三日で十分でしょ」

地方からはるばる都会にやってきた青年たちが、おそらくみなそうであったように、彼女もまた希望に燃えてよく学んだ。

「勉強のなかでは、数学と地理の成績が

よかった。好きだったね。世界地図を広げて、その上で旅をするわけです」

壇上にあがって、黒板に掲示された世界地図を指さしながら、各地を解説するという口頭発表で、彼女は表彰され、絹の帯をもらったという。

●就職と結婚

専門大学で四年間学んだのち、一九五三年、オプス県に帰郷して就職した。一般に、勤務先は国から配分される。当時はおおよそ郷里で就職することができた。彼女は、生まれ故郷のソムのホルショーに配属された。ホルショーとは、牧民から羊毛や毛皮などの畜産物を集める一方で、牧民にさまざまな物資を提供する流通拠点である。牧畜組合ネグデルがまだ組織化されていなかったから、ホルショーはいわば草原の国営総合商社であった。「初任給は一四〇トゥグルグだった。それで、小麦粉だの、米だの、砂糖だのを買った。やがて月に三〇〇トゥグルグぐらいに増えた。ホルショーにはごくまれに衣服や、絹や綿布が入ったけど、私たちはまず買わない」

そうした貴重な品物は、人びとに提供すべきであって、店の人間がわれ先に買ってしまつてはならないからである。高価だから買えないのではなく、貴重だから買わなかったのだ。

「野菜も店頭には並んだけど、誰も食べなかったよね。私は学生寮でいやでも野菜を食べることを学んだけれど、卒業して帰郷したらすぐにやめた。ホルショーから人びとに無料で（野菜を）配るんだけど、みんな捨ててしまふ。リンゴが入ってきたこともある。買う人なんていないから、くさっちゃう。結局、アイマグに電話して引き取ってもらったよ」

アイマグとは県庁所在地のことも意味し、ここではオランゴム市をさしている。近年、首都ウランバートルではキャベツやニンジンなどかなりふんだんに野菜が手に入り、都会人の食卓を飾っている。一方、地方では野生ネギならともかく、野菜はそれほど多くない。まだまだ野菜を食べ慣れない牧民も多い。緑色の葉っぱ状の野菜が入っているものなら「草が入っている」と毛嫌にする牧民もいるほどである。わずか半世紀のあいだに、モンゴルの食生活は激変した。と同時に、都会と地方との差が急速に拡大したのであった。

ここで一年勤めたあと、同県のナランボラグ・ソムに転勤し、そこで生涯の伴侶とめぐり会う。知り合つてもなく二四歳のとき、三歳年上のその男性と結婚した。モンゴルの伝統的慣習からみると、両者ともにきわめて晩婚というべきであらう。社会主義は、このような青年

たちをつくりはじめていた。草原の牧民のなから、上京し、勉学し、勤労する人びとを育てはじめていたのである。

新居は、彼女の母が用意した。役所に婚姻届けをするばかりで、挙式などはなかった。伝統的な祝事はすべて非文明的であると批判されていた時代であった。

やがて長女が生まれる。自宅で、病院から人をよんで出産した。ちょうど出産を契機に、彼女は仕事をやめることになる。ただし、決して家庭に入るためではなく、再び学ぶために仕事をやめた。

「法律学校ができるというので、アイマグ（オランゴム市）で試験を受け、合格したので六〇年の九月一日から入学した。法律学校は、もう大人ばかりで、寮なんてないから、市内の親戚の家にやっかいになった」

こうして、彼女は再びウランバートルへやってきた。

勤労者を対象としたこの専門学校で学んだ三年間は、彼女にとって生活面でおそらくもっとも厳しい時代だったろうと思われる。死産をへて、長男を産む。母を失う。

夫は同様に専門知識の習得に多忙で、子どもは人に託すしかない。人に頼めないときには、いたしかたなく鍵をかけて家を出たという。三、四歳の子どもたちだけを残して。保育園に託すことができるようになったのは、六

三年の卒業以降であるらしい。

現在のバヤンゴル・ホテルのあたり、トール川の北側に住んでいたという。そのあたりは「水の通り」とよばれていた。井戸があって、中国人が水を汲み、馬車や牛車に大きな桶を備え付けて水を売っていたらしい。水道の完備された建物はまだまだ少なく、人びとは「オサー・アバー（水を買え）」という呼び声を聞いて、水を買ったのであった。桶からは水がしたり落ちて、いつも通りは水浸しであったために、「水の通り」とよばれていたとのことである。現在もこの地名は残っているし、井戸も健在だ。ウランバートル市北郊の天幕群に配水するために、現在では給水トラックが時折この井戸にやってくる。彼女の新しい都会生活の出発点は、市の中心部からはずれており、いわば場末だったようである。

●会議、会議、会議

卒業後の職場として、今度はウランバートル市の警察に配属された。女性の少ない職場である。ちなみに、それでも一〇％はいるだろうとのこと。以来、一九八八年に定年退職するまで二五年間、ずっと検察官として働きつづけてきたのだった。制服の肩に付ける星はまず一つから始まり、退職時には四つになっていた。そして、一カ月の給料は一〇〇〇トゥグルグに達していた。八八年

当時としてかなりの高給であったことは確かである。

四半世紀ものあいだ、彼女は職務柄、犯罪を見つけてきた。

「犯罪には流行がある。六〇年代半ばまでは中国人がたくさんいたからね。アヘンは売るわ、賭事はするわで。

でも中国人には泥棒はいなかったよ。賭事に熱中するやからは、もちろんモンゴル人にもいる。有名人もいた。

彼らはもう中毒だから、何度逮捕されてもやめはしない。しまいには、すっかりなじみになってしまふ。賭の有名人と知り合いになったところで、ちっとも嬉しくもない

けどね。六〇年代半ばから七〇年代にかけては、帽子を奪い取るのが流行した。略奪といってもかわいらしいものだった」

犯罪をあつかう業務はまことに気苦労の絶えないものだが、何よりも精神的に苦痛だったのは、おびただしい

会議の連続であったという。

「ああ、それについてはもう説明しようもないってもんだよ」

そう言いながら、彼女は右手を額にあててそのまま前に突き出した。それは、モンゴル人の誰もがとても大変

だということを表現する際の独特のしぐさである。説明しようのないほどくだらないことだと言いながら、それ

でも彼女は解説してくれるのだった。

「数えきれないほどの会議がある。一週間に一度のもあれば、一カ月に一度のものもある。それがたまって毎日会議づけになる。一日に一つですまない日もあるし、朝から

晩まで会議なんてこともしょっちゅうあるしで……」

たとえば、党細胞組織会議、職場友好会議、革命青年同盟細胞組織会議、政策学習会、政策集会、女性懇談会、幹部会議、モンゴル・ソ連友好協会会議などなど。

「もう、頭が痛くなるでしょう。五カ年計画なんぞ出ようものなら、そこに掲げられた数字を暗記しなくちゃいけないんだよ。忘れたりしたら反逆者にされてしまう。

モンゴルのだけじゃなくって、ソ連の資料までもだよ」

政策を学習するために、新聞を強制的に購入させられ、代金は給料から天引きされていた。

「そんなわけだから、ほんとうに精神が疲れるという病気にかかってしまふんだよ」

彼女は不眠症にかかり、しばしば通院し、入院したことさえあるという。

「ほんとに大勢の人が同じ病気にかかってたよ。精神科はいつも満員だった」

彼女の職場である警察では、およそ四分の一が「ダलग」とよばれる局長クラスの人びとであり、彼らはこの

病にはかからないもののださうである。そして、近年の若者もまた……。

「職場にいた」最後の頃は、年長者として若者の指導にもあたった。指導者になって、若い人たちが政策綱領に出でくる数字を覚えていかどうか監督するわけ。彼らときたらまるっきり覚えようとしななんだから」

モンゴルの民主化運動は一般に一九八九年末から始まったとされているが、実際にはそれ以前から、もはや若者たちはかつてのような社会主義的な職場教育を拒否していた。

「いまじゃ、あの病氣、精神が疲れるというあの病氣は、どこへ行っちゃったんだらうねえ」

会議のほかに、彼女たちを大いに苦しめたものが、計画書の作成である。出勤すると、朝一番にまずその日の労働の計画書を書かなければならない。そして、上司のサインをもらう。帰宅時にはその計画が遂行されたかどうかというチェックがなされる。計画書は毎日の単位ばかりでなく、一週間単位、一カ月単位、そして人生に関する計画までも提出しなければならなかった。

「計画書を書いて許可をもらう暇があったら、仕事をすればいいのにねえ。計画書の作成がどれほど仕事のさまたげになったことか……。こんな笑い話がある。計画書

の作成に困って、人のを丸写ししたのはいいんだけど、名前までそのまま写したってね」

おびただしい会議と計画書の作成は、どんな職場でも同様に要求されていた。恐ろしいほどに抑圧的なことだったという。ソビエト社会主義はこのようにして、すべてを停滞させ、社会全体を冷凍庫に入れてしまったのである。

「一生涯、計画書ってのを書き続けたわけだよ。トラックの荷台に一杯分は書いたろうなあ……。それについては、語るすべもない。ああ、話すすべもない」

まるで語るに足りないことだといわんばかりに、彼女は話をやめてしまった。

●孫たちの未来へ

ソ連のベレストロイカの影響を受けて、一九八七年から八八年にかけて、モンゴルのあらゆる職場で年長者を積極的に退職させる動きがあった。若い人たちが力を発揮できるようにという配慮からである。彼女の場合は、ちょうど五五歳に達していたし、孫娘も生まれて世話する必要もあった。結果的に、社会主義の終焉とほぼ同時に彼女は職場を去ることになる。彼女の生きてきたこれまでの道のりは、まさしく社会主義の道のりでもあったのである。

「長年着てきた制服をぬぐということが、唯一ちよっぴり苦しかった。今でも、町で制服を見かけるとね、私は立派に見える」

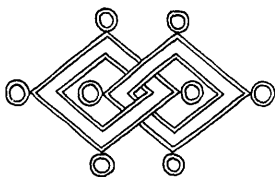
制服をぬいでからは、もっぱら孫娘の世話にあけくれた。娘の娘すなわち外孫にあたる。彼女自身、長女が生まれた頃、母にあずけて育ててもらっていた。そうして育った娘の娘を今度は彼女が世話をする。母は子を産み、祖母が育てる。彼女はいまや子育ての適齢期にいますえよう。

彼女は孫娘のことを愛情を込めて「ガルゾー・シャル（狂った黄色）」とよぶ。父親に似て髪の毛が茶色いので黄色といい、また活発に動き回る性格なのでそうよんでいる。九歳の少女なのにもう一〇年制学校の五年生。日本の中学一年生にあたる。普通よりも二歳も早く就学した。もともと少女の父は、家の近くにあるロシア語学校に就学させるつもりだったらしい。しかし、七歳未満でも受けつける学校があるという情報を得た彼女は、さっさと孫娘をつれて受験させたのだった。見事に合格して五歳で入学した少女は、このままゆくと、一五歳で大学に進学することになる。

この国で過去にこのような事例はなかったし、今後も

ないだろうと思われる。民主化の波を受けてタガがはずれた瞬間のできごとだからである。一瞬、教育制度がゆるいだ間隙に、利発な少女を生かすおばあちゃんの活躍があった。

社会主義を知らない子どもたちが、この国の未来になつていく。彼らを手塩にかけて育てているのは、実のところ、彼女のような人たち、すなわち社会主義を懸命に生き切った女性たちなのである。



●現代モンゴルへの歩み

清朝支配下のモンゴル

萩原 守

●モンゴル史の時代区分

地図を見ればわかるように、現在のモンゴル民族の居住地は国境によって大きく三つに分断されている。北から順に、ロシア連邦内のブリヤート共和国、独立国であるモンゴル国（いわゆる外モンゴル）、中華人民共和国内の内蒙古自治区（いわゆる内モンゴル）の三地域である。モンゴル民族はこのほかに、ロシア領内ではカスピ海北西岸ヴォルガ河口西部のカルムイクヤ共和国、中国領内では新疆ウイグル自治区北部、青海省などにも居住している。そしてこれらの錯綜した居住形態には、一つ一ついわく因縁が存在し、歴史を詳しく振り返ってみないとその理由は理解できない。

モンゴルの歴史というと、誰でもまず英雄チンギス・ハーンを思い浮かべるであろう。その通りモンゴル民族は、まぎれもなくチンギス・ハーンその人によって一三

世紀に統合・形成された。

彼が登場する以前のモンゴル族は、後にモンゴル高原と呼ばれることになる草原地帯の中の北東の一隅に存在するごく少数の遊牧集団に過ぎなかった。しかしチンギス・ハーンの勢力拡大とともに、その直接の傘下に入った人びとがこぞってモンゴルを標榜するようになり、モンゴル帝国の世界支配が崩壊した後も、モンゴル高原に残った遊牧民の大多数はそのままモンゴル族を名乗り続けたのである。

一三世紀に新たに「モンゴル」を標榜した人びとは、もとのモンゴル族と同じ言語を話す人びとばかりではなく、本来トルコ系の言語を話していたと思われる人びとも多い。それらの中には、オングート族のように言語も意識も完全にモンゴル化していった人びとや、オイラト族（西モンゴル族）のように、一四一五世紀頃からいつ

たんモンゴルという意識を捨てて東方のモンゴル本族と対立しはじめ、ずっと後に再びモンゴル族としての意識を回復した人びともいた。

ここで、モンゴル民族の歴史を区分する上で重要と思われる年代をいくつか列挙してみよう。まず、チンギス・ハーンが即位した西暦一二〇六年、元朝の中国支配が崩壊し、モンゴル人の勢力がモンゴル高原へ後退した一三六八年（すなわち明王朝の成立年）、内モンゴルが清朝支配下に入った一六三四（一三五）年、外モンゴルが清朝支配下に入った一六九一年、清朝の崩壊（辛亥革命）とともにボグド・ハーン（チベット仏教の活仏ジエブツンダンバ・ホトクト第八世）政権が内外モンゴルの独立を宣言した一九一一年、そしてモンゴル人民党の下で外モンゴルのみが再独立を達成した一九二一年、ということになる。

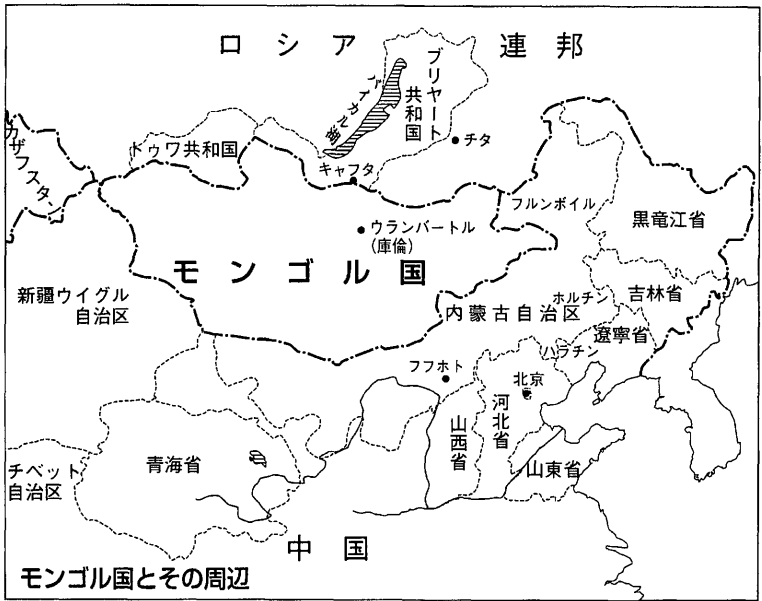
同時にこれらの年代によって、モンゴル史は大ざっぱに時代区分することができる。例えば、一二〇六年から一三六八年までは仮に「世界帝国の時代」、一三六八年から一六九一年まで（ほぼ中国の明代に相当）は「モンゴル高原で独立していた時代」あるいは「モンゴルとオイ

ラト（東西モンゴル）の対立の時代」とでも命名できよう。そして一六九一年から一九一一年までは「清朝支配下の時代」、一九一一年から一九二二年までは「ボグド・ハーン制モンゴル国時代」、一九二一年以降は仮に「外モンゴルのみ独立時代」とでも命名することができよう。そこで以下、参考文献に乏しく一般にあまり知られていない清代を中心にして、現代モンゴルへの歩みを述べてみたい。

●ムチの清朝支配

上述の長い歴史の中で、現代モンゴルに直結するその原形ができたのは、ほぼ一七〇一八世紀のことである。逆にいえば、チンギス・ハーン時代のことをいくら知っていても、現代モンゴルの本質は残念ながら見えてこない。

この一七世紀は、モンゴル遊牧民の軍事力が相対的に衰えはじめ、ロシアと中国に併合されていく世紀である。前述のブリヤート・モンゴル族は北西方向から進出してきたロシア帝国に併合され、内外モンゴルは中国東北部の満州族が樹立した中国王朝清朝の領土となった。そして清朝への帰属時期の違いが、内モンゴルと外モンゴル



の区別を生む一つのきっかけともなっていた。早くから清朝治下に入った内モンゴルでは、東部のモンゴル遊牧民が中心となつて清朝の軍事力を積極的に支え、清朝宮廷との深い同盟関係を築き上げる。一方、帰属当初の外モンゴルでは形式的な間接統治がおこなわれたにすぎず、清朝宮廷との一体感も内モンゴルに比すればはるかに希薄なものであった。

結局一七世紀末の段階で、現在の新疆ウイグル自治区北部を根拠地とするオイラト族の遊牧帝国ジュンガルを除いて、他のほとんど全てのモンゴル族居住地が独立を失ったわけである。さらに清朝は、一七五七年にジュンガルをも滅ぼして併合してしまふと、一七八〇年代頃から後顧の憂いなく外モンゴルでも盟旗制と呼ばれる整然たる司法・行政機構を整備しはじめ、同時に徹底した文書行政を強いるようになる。

すなわち北京の清朝皇帝を頂点とする中国流の官僚機構が内外モンゴルで各々ピラミッド型に形成され、例えば、徴税、徴兵、裁判、飢饉回避、北京への参勤等々あらゆることさらに命命や回答・報告が、この機構を通して組織的にやり取りされ、皇帝の意思がモンゴル

の隅々にまで効率的に行き届くこととなった。かつ、これらの命令や回答・報告は全て一定の書式に則ったモンゴル語や満洲語の文書でやり取りされ、各級の役所で各々整然と保管されることになったのである。もちろん、官僚は中国におけるような文官試験を突破したインテリの科挙官僚ではなく、チンギス・ハーンの血統を引く現地のモンゴル貴族であつて、もとより中国本土のような純然たる官僚ではなかつたが、この行政システム自体、確かに有史以来モンゴルには全く存在したことの無いものであつた。

これによつてモンゴルは厳しい管理下に置かれ、清朝からの離脱や反乱等の不穏な動きは未然に防ぐことができざるはずであつた。清朝はさらに、モンゴル人の自由な長距離移動を禁止して「旗」と呼ばれる最小行政区画に縛りつけることによつて、モンゴル人の不必要な軍事活動を抑えるという政策をも実施した。これらは、いわばアメとムチの政策のうちのムチに相当する部分である。

●アメの清朝支配

一九世紀の後半頃になると、この徹底した行政システムもさすがに緩みが目立ちはじめ、同時に内モンゴルは

漢人商人や農民の激しい進出にさらされることとなる。もともと明代の一六世紀後半頃から、内モンゴルのフフホト周辺を中心として徐々に漢人農民がモンゴル草原に進出してはいたが、清朝は、皇族の父祖の地たる中国東北部（満洲族等の狩猟民が少数居住むのみの森林草原地帯）と、清朝の軍事力の一翼を担うモンゴル高原とには、漢人の流入を厳しく禁じた。これは、満洲族やモンゴル族の狩猟遊牧生活を保護して軍事力の水準を維持させるという目的や、彼らなるべく優遇して清朝への忠誠心を引き出すといった種々の目的を持つ政策であつた。

満洲族とモンゴル族への優遇政策はこればかりではなく、王侯貴族を官僚として任命し俸禄を与えることによつて、その支配権力をある程度保証したり、犯罪者を処罰する際の刑法を民族の伝統に配慮して民族別に定めたりといった、少数民族政権独特の特殊な政策をも実施した。総じて、満洲族とモンゴル族が漢化（中国化）するのを断固として防ぎ、民族の古い素朴な伝統や誇りを保持させることによつて、支配者側（満洲族皇室と清朝政府）の軍事力や権威をも保持するという政策なのであつた。

しかし中国本土での人口爆発に伴つて、山東省、河北

省、山西省等から真北の方角へ非合法的な形で入植している。漢人は跡を絶たず、満洲族や内モンゴルのモンゴル族は、一九世紀には既に南部の居住地で漢人入植者との混住状態となり、漢人農民との土地争いや漢人商人による借金取立問題等の民族紛争が各地で発生していた。

清朝によるモンゴル統治政策でもう一つ注目すべきなのは、チベット仏教の保護である。チベット仏教がモンゴルに入ったのは、もちろん一三世紀のフビライとパクパの頃にまでさかのぼるが、当時はまだ一部の支配者階級に広まっただけであり、しかもその宗派はサキャ派と呼ばれるものであった。

今日全モンゴルで信仰されているゲルグ派^ヴという宗派が本格的に導入されたのは、一五八六年にチベットのダライラマ三世がフフホトを訪れてからだといわれている。そして清朝の支配下に入る頃には既にモンゴルにも活仏といわれるチベット風の生き仏が存在して、広く一般庶民の信仰を集めていた。この活仏のうち比較的厚く信仰されていたのは、内モンゴルではチャンジャ・ホトクト、外モンゴルではジェブツンダンバ・ホトクトである。ゲルグ派の活仏は世襲ではなく、死んだ後も別の男の子と

して生まれ変わって跡を継ぐという転生の形式になっており、両活仏とも何代にもわたって転生が繰り返された。清朝政府は、モンゴル優遇政策の一つとしてこれらチベット仏教の寺院や活仏を手厚く保護した。その背景にはモンゴルを仏教的な教えで円満に統治するという巧妙な意図も隠されていたはずである。以上は前述のアメとムチのうち、アメの部分に相当する政策である。

●独立への条件

さてここからが肝心なのであるが、これら清朝による巧妙な統治政策の結果、内外モンゴルにはかつてなかったようなモンゴル人自身による整然たる行政機構が完備され、二人の大活仏を頂点とするチベット仏教信仰に裏打ちされたモンゴル民族としてのアイデンティティや一体感が自然にできあがっていった。しかし考えてみればこれは、清朝政府が最も恐れ警戒していた事態のほずではなかったか。清朝から離脱して独立国を形成するには最適の状態だからである。

清朝も少しは恐れていたとみえて、ジェブツンダンバ・ホトクトが有力なモンゴル貴族の家系に転生して過度の権力を持たぬよう、わざわざ三世以降はチベット人

から転生者を選ぶという規則を定めていたのだが、そんなことは全くおおかまいなしで、いやチベット人だからこそ余計にありがたみが増したのかも知れない。信仰の集まりぐあいには尋常ではなかつた。

こうして、歴史的客観的に考えてみると二〇世紀初め頃までには、特に外モンゴルは独立国を形成するのに最も有利な条件を二つ備える結果となつていた。このうち、行政機構の方は百パーセント清朝の政策のおかげであり、活仏の方も多分に清朝のおかげをこうむつて整つた条件である。いずれも歴史的には、清朝政府の思惑と正反対の方向へ進んでしまつたのであつた。

かつてモンゴル人民共和国時代のモンゴル人歴史学者たちは、清朝政府の政策について、モンゴル民族を宗教によつて愚鈍化させ、モンゴル貴族を肥え太らせ、一般牧民を徹底的に搾取し貧困化させ、その結果民族の覚醒を大きく遅らせた、と口を極めてのしつたものであるが、その見方はあまりに一面的である。

多分に偶然の要素もあるとはいへ、清朝の政策のブラスの面、すなわち行政機構と宗教こそが外モンゴルに独立をもたらしつたといつてよい。また清代のモンゴル牧民

が本当にその前後の時代に比してより貧困であつたかどうかは、まだまだ簡単に結論を下せるものではない。

ところで一方の内モンゴルはというと、漢人との混住によつて既に中国化が進みすぎており、独立は実質上困難な状態にあつた。ロシア領のブリヤートもロシア化が進みすぎ、同様の状態であつた。一九一一年時点での外モンゴルの幸運さを確認するためには、同様に清朝治下にあつた新疆やチベットの例を参照すればより明瞭になる。

この両地方では、清朝はモンゴルのような直接的な支配を実施せず、ほとんど現地任せのままであつた。そのため土着勢力の完全な再編はおこなわれず、首尾一貫した徴税・徴兵のシステムや網の目のような司法・行政機構は存在しなかつた。また新疆ではジェブツンダンバに近いような宗教権威を一身に集める人物は存在せず常に分裂状態であり、ダライラマ政府がモンゴルと同時期に独立宣言を發したチベットでも、統一された法律や整然たる行政機構など夢のまた夢というのが現実であつた。

清朝治下の各地域は、こういう状態で一九一一年の辛亥革命を迎えたのであつた。

●現代モンゴルへの歩み2

モンゴルの独立から現代まで

萩原 守

●追いつめられるモンゴル族

二〇世紀に入ると、清朝はついに漢人の北方への入植制限をとりやめ、逆に入植を積極的に推進するようになった。これは、ロシア帝国の勢力が一九世紀を通じて着実に南下してきたため、国境付近の人口密度が低いとロシア側の侵略にさらされやすく、また漢人住民が増えれば中国領であるという既成事実がつくれるという清朝側の新しい政治認識に基づく政策であった。

しかしいつたん合法化されてしまうと、もはや漢人の大量流入は怒濤の流れとなり、中国東北部は瞬時にして本土並みの漢人世界と化してしまった。日本の勢力が進出する頃には、満洲族は既に影も形もない。東北部は内モンゴルに比して降水量が多く農業に適していたため、漢人農民がより進出しやすかったのである。清朝皇室の出身民族である満洲族は、営々と守ってきた父祖発祥の

地を完全に失ったばかりでなく、以前から危なかった自民族の存在そのものが今や風前の灯火ともしびとなってしまった。内モンゴルでも東部や南部のハラチン、ホルチン、トゥメト（フフホト付近）あたりでは、民族紛争がさらに多発し、圧倒的に不利なモンゴル族の側には、根強い反漢感情が植え付けられることとなった。また外モンゴルでも漢人商人の進出に伴ってよく似た反漢感情が発生していたが、降水量の少なさから漢人農民はあまり進出していなかったため、民族としての危機感もさほど深刻なものではなかった。

二〇世紀の最初の一〇年間、漢人入植者に侵蝕された内モンゴルでは反漢暴動が頻発しており、トクトホ、ハイシャン、オタイ、グンサンノルブ、ダムディンスレン、バボージャブといった東部・南部のモンゴル貴族たちは、満洲族のように漢人に飲み込まれてしまわぬよう、藁わらに

もすがる思いで、あらゆる手段を模索していた。例えばトクトホは「馬賊」となって漢人を襲撃して回り、清朝の官憲に追われたあげく、ロシアへ亡命した。ハイシャンは、清朝を見限って全モンゴルの独立国を建てるよう、外モンゴルの王侯貴族を説得して回った。オタイはロシアの財政援助に内モンゴルの光明を見出そうとするが、失敗した。グンサンノルブやバボージャブは、日本の軍事財政援助に同様の夢をみるが、これも失敗に終わる。

●ハイシャンの活躍

このうち最も注目すべきは、ハイシャンの説得工作である。ハイシャンは民族紛争が最も激しかったハラチン地方で、一八六二年頃に生まれた。彼は反漢暴動にかかわって官憲に追われると一九〇九年頃から、まだ漢化されていない外モンゴルへ密かに脱出し、何と八〇人近くもの王侯貴族を訪れて、モンゴルの危機を説いて回ったという。この頃の彼の活動は、フィンランドの言語学者ラムステッドの旅行記にも登場する。

当時の外モンゴルの人びとはまだまだ現状認識が甘く、酒浸りの愚鈍な王侯も多かったが、幸いハイシャンの工作は成功した。危機感を持つハンドドルジ、ツェレンチ

ミドら有力な王侯やラマ(僧)たちが集まって一九一一年の七月頃から秘密の会合を開き、モンゴル独立への財政援助を求めてロシアの首都サンクトペテルブルグに使節団を派遣するにまで至った。しかもハイシャン自身、この使節団に加わっている。

こうしてハイシャンやツェレンチミドらの努力によって独立への準備は徐々に整い、一九一一年の一〇月一日に中国本土で清朝打倒の辛亥革命しんがいが始まった時には、幸いにして外モンゴル王侯たちの独立の方針は既にまとまった段階にあった。そしてこの年の十一月にはモンゴルの臨時政府が発足、一月一日には独立宣言が発せられ、この年のうちにモンゴル政府の骨格が形成された。ピラミッド型の地方行政機構は既に存在していたし、ジエブツンダンバを国家元首にいただいて民族の意思を統一することは誰から見ても理の当然であった。

それにしても清朝の崩壊をあたかも予期していたかのようなこの手回しの良さは、多分にハイシャンの説得工作に負うところが大きい。そして行政機構と国家元首は、清朝時代の遺産そのものであった。清朝皇帝の代わりに活仏を持つてくるだけでそのまま独立できるわけだから、

實質上政府を作ることだけが困難な作業なのであった。ラムステッドによると、ハイシャンは、「漢化したモンゴル人」だとして当初外モンゴル人から軽蔑されて相手にしてもらえず、相当苦勞したらしい。

余談であるが、この話を聞くと、筆者は市場経済にさらされて苦しんでいる現在のモンゴル国を連想してしまふ。市場経済に精通した内モンゴル人を各種の顧問にでも据えればうまくいくと思うのだが、彼らは内モンゴル人を「漢化したモンゴル人」だと軽蔑するばかりで重用しようとならない。内モンゴル人の活躍で独立がスムーズにいったという歴史から学ぶ必要がある。

●独立の挫折

さてこの後の歴史については、簡略に述べよう。こうしてできたボグド・ハーン制モンゴル国には、前述のトクトホ、オタイ、ダムディンスレンら内モンゴル各地の活動家たちも集まってきて、全モンゴルの解放独立を目指し内モンゴルへ軍隊を送る。しかしロシアと中華民国の強力な干渉によって失敗し、結局外モンゴルだけの独立にとどまることとなる。さらに一九一五年のキャフタ三国協定によって、モンゴル国は独立を取り消され、中

華国内の一自治領に格下げされてしまう。そればかりか、一九一七年のロシア革命の混乱で二大国のバランスが崩れると、一九一九年には中華民国の軍事力によって何とこの自治すらも「自発的に返上」させられてしまう。

またロシア革命に伴うシベリアでの内戦で、反革命派であるロシアの白軍が多数モンゴルに敗走・乱入してくる。一九二〇年に乱入してきたウングェルン男爵の混成部隊も、この白軍の一派であった。ウングェルンは、もともとシベリアでセミョーノフ（日本でも有名になったコサックの頭目）軍の下にいたため、彼の軍には日本兵やブリヤート兵もかなり参加していた。セミョーノフは、シベリア干渉戦争にやってきた日本軍の暗黙の支持の下で、一九一九年二月にシベリアのチタの町で、ロシア帝国の實質的復活を夢見て「大モンゴル国」結成計画をでっちあげた男である。しかしボルシェビキの赤軍による日本軍の敗北とともに、彼の計画も失敗に終わった。

この計画に加わって行き場を失ったウングェルンは、モンゴルに入り、モンゴル人の反中国感情をうまく利用して一九二一年初めに首都庫倫（現ウランバートル）の中国軍をロシア国境のキャフタへと追放し、外モンゴルの束

の間の独裁者となった。彼はかなり狂気じみた性格で、ユダヤ人やボルシェビキを皆殺しにしたのみならず、ところかまわず荒し回り、モンゴル人を含む全ての住民から恐れられた。

一方、モンゴル人民党の基となった二つの革命グループ、「領事館の丘グループ」と「東庫倫グループ」ができはじめるのは一九一八―一九年頃のこと、前者の中心人物はボドー、後者の中心人物はダンザン、ドクソムらであった。革命を指導したと長らくたたえられてきたスフバートルやチョイバルサンは、実は駆け出しの若者にすぎなかった。この両グループは合体して一九二〇年六月二五日にモンゴル人民党を結成し、ソ連赤軍の援助を請いつつ中国軍やロシア白軍からの外モンゴル解放を模索することとなる。

モンゴル人民党は、一九二一年二月頃からロシア国境沿いで義勇兵を組織し、三月にまずキャフタの中国軍を追放した。そして赤軍の協力を得て五―六月にはキャフタ付近でウンゲルン軍の主力を撃破、七月八日には庫倫を無事解放した。モンゴル革命はこの後、一九二二年一月に西部モンゴルでの白軍掃蕩戦が完了した時点で終了

する。

モンゴル人民党には多くのブリヤート人インテリが協力しており、この革命の成功も彼らに負うところが大きい。モンゴル近代史で強調されるべきは、一九一一年のモンゴル独立が内モンゴル出身者に負うところ大であるということと、一九二二年のモンゴル革命がブリヤート・モンゴル人たちに負うところ大であるということである。

●革命後のモンゴル

さてモンゴル人民党の樹立した政府では、再びジエブツンダンバ八世が国家元首となり、ボドー首相の下で、あまり社会主義的でない政策を実施する。

しかし一九二四年にジエブツンダンバ八世が亡くなるのと、その転生はもう認定されず、ソ連とコミンテルンとの干渉の下で、少しずつ社会主義的な色彩が現れてくる。国名はモンゴル人民共和国となり、首都の名はウランバートル(赤い英雄)、党名はモンゴル人民革命党となる。そして、歴代の首相・党委員長経験者や革命の功労者が次々と失脚したり処刑されたりする、暗い社会主義時代に突入していく。これ以降の歴史については旧モンゴル人民共和国の公式見解以外にまだ厳密な研究もあまり多

くなく、筆者としては今後の歴史学の発展を待つしかないので、ごく短く述べるにとどめたい。

初代首相のボドーとその仲間の革命功労者たちは、陰謀を企てたとして早くも一九二二年八月に処刑されている。真相は不明であるが、社会主義的な政策をめぐる深刻な路線対立があったことだけは確実である。また一九二四―二八年に政権を担ったダンバドルジは、開明的先進的な諸政策を次々に打ち出すが、内モンゴル人民革命党に援助を与えたことや狭量な社会主義政策にとらわれなかったことから、コミンテルンとソ連の支持を得られず、左派によって解任されてモスクワへ追放された。モンゴル革命に尽力して一時は政府顧問、モンゴルでのコミンテルン代表まで務めたブリヤート人リンチノヤ、モンゴル人民党の綱領作成にも加わり常にモンゴル革命に尽くしたブリヤート人学者ジャムツァラーノも、民族主義者というレッテルを張られて、この前後の時期にソ連へ召還され、刑死あるいは獄死している。モンゴルのことを心から憂える立派な人物から順々に消されていった、まことに悲しい時代であった。

一九二九―三二年には、モンゴル政府は厳しい宗教弾

圧や私有財産没収、遊牧の強制的集団化など急進的な社会主義政策をとり、各地で暴動が発生した。その結果、暴動指導者として多くのラマ（僧）や富裕牧民が虐殺された。その後は急進政策がやや緩められたものの、反革命という名目で殺された国民は数知れない。三〇年代後半にもチョイバルサンら親ソ派によって、閣僚経験者ら多くの政治家や文学者らが反革命の名目で処刑された。もちろん教育制度の充実や産業の振興などプラスの面もなかったわけではないが、何とも野蛮な時代であった。

一九三九年、チョイバルサン首相のモンゴル軍はソ連軍と共にハルハ川戦争（ノモンハン事件）で日本の侵略を無事くいとめ、第二次世界大戦でも独ソ戦に苦しむソ連に一致協力した。また第二次大戦の最末期にはソ連軍と協力してモンゴル軍も、内モンゴル・中国東北部へ侵攻した。その後内モンゴルから軍隊が引き上げる時には、内外モンゴル共に統一合併への未練たっぷりであったものと思像される。またこの時にソ連の捕虜となった日本人の一部が、過酷な状況下で首都ウランバートルその他に抑留され、スフバートル広場周辺の主要建築群を建設させられたりしたことも忘れてはならない。

●現代のモンゴル

戦後は一九五二年に首相となったツェデンバルの下で、緩やかな社会主義政策がとられた。一九五九年には遊牧の集団化が完了し、ソ連のコルホーズに相当するネグデル（協同組合）が全国に配置された。また一九四〇年代から文字改革が進められ、戦後はロシア文字による学校教育の徹底によって識字率は急上昇した。福祉・学術・文化政策も徐々に充実し、ようやくにして社会主義国らしい雰囲気ができあがった。しかしもちろん、職業選択の自由や遠距離引越しの自由などはなく、あくまでソ連型の社会主義国なのであった。中ソ対立時代も一貫してソ連側に付いたが、一九六一年には国連に加盟、一九七二年には日本とも国交を回復した。

ツェデンバルは一九八四年に失脚し、代わってバトムフが党書記長となる。その後ソ連のペレストロイカの影響で一九八七年頃から改革が模索されはじめ、一九八九年末にはベルリンの壁崩壊と軌を一にして民主化運動が盛り上がった。そして一九九〇年に初の複数政党制民主選挙が実施される頃から徐々に社会主義を捨て去り、一九九二年には国名もモンゴル国と改名した。ただウラ

ンバートルの名はそのまま、モンゴル人民革命党も現在野党として健在である。

●モンゴルと社会主義

ソ連解体とソ連共産党消滅の激変によってモンゴル近現代史は、現在その評価が大きく変化しつつある。従来高く評価されてきた一九二一年革命の意義は相対的に低下し、一九一一年の独立宣言がより高い評価を受ける傾向が出てくるかもしれない。

ソ連もソ連共産党も消滅して二〇世紀が終わろうとしている今日、かつてあれだけ人びとを熱狂させた社会主義とは一体何だったのだろうか、筆者は今自問している。あるいは社会主義とは一種の熱病のようなものだったのかもしれないが、これこそがわれわれの生きてきたこの二〇世紀の世界を特徴づける思想であったことだけは、誰にも否定できないであろう。ロシアやモンゴルが社会主義を捨て去った今こそ、社会主義の歴史の真の研究がスタートし、これからようやく社会主義の本質がわかってくるのではないだろうか。一九二一年以降の歴史は、現在ようやくそのベールを脱ぎ去りつつあるのである。

センギーン・エルデネ 一人前の人になった私

訳…小長谷有紀

●ブリヤートの悲哀

私は、第一六番目のラプチュン（干支^{まど}）の第三番目の、つちのとみ（己巳）の年すなわち一九二九年の冬の中の月（旧暦二月）に、モンゴル国の北境付近を流れるオノン河のほとりに生まれた。このオノン河のほとりにあるデルーン丘はチンギス・ハーンの生誕地であり、それゆえにモンゴルの「ゴロムト」（天幕の中心に位置する火の場所すなわち中心点）と見なされる地域である。ただし、私自身が生まれたのは、一九二〇年代初めにシベリアのバイカル湖より東へ約三〇〇キロメートルの所からモンゴル国へ逃げて移住してきた、ブリヤートの貧しい牧民の家である。わがブリヤートの運命はなんと悲哀に満ちていることか。事の次第を理解するために、歴史のページを振り返って見る必要があろう。

バイカル湖のこちら側の広大な土地に、モンゴル族の一派であるブリヤートは、チンギスの時代から住みつき

慣れ親しんできた。一七世紀の半ばにシベリアと極東方面に占有を拡大し、大いなる旅を急進させていたロシア皇帝のカザフ族の支配下に入った。

やがて一九一七年に十月革命と遭遇し、二〇年代初めになるとシベリアや極東において戦火を交え合うロシアの赤軍と白軍のあいだの殺戮^{ころり}が始まり、人びとを混乱させた。そんな中で、ブリヤートの牧民たちがチンギス・ハーンゆかりの地のために戦おうとしたのは理のあることであろう。しかし、そのチンギス・ハーンの地でも赤の革命の胎動が始まっていたことを、人びとはどうして知り得ただろうか。

一九二一年に人民革命と出会った。人民とは名ばかりで、本当は、レーニン率いるロシアのボルシェビキたちの管轄下にモンゴルを入れる革命へと変化^{へんか}した。やがてモンゴルはコミンテルンの実験場と化した。

こうしたブリヤートの「大移動」の夜明けに、一部の

人びとは、当時の満洲国の版図内にあった大興安嶺の山麓にいたり、そこに住み着いた。ロシアおよびモンゴル両国で一九三〇年代半ばから始まったおそるべき受難の一つの原因は、ブリヤートがもつばらこのようにモンゴルや満洲方面に移住したことからきている。

モンゴル国内では、一九三四年からブリヤートをまとめて撲滅する大きな受難が始まった。当時、モンゴル国には四万人あまりのブリヤートが暮らしていた。すなわち、およそ一万戸だったということである。

これらの家庭から、二〇歳以上のおよそすべての男たちが、十月革命を裏切った反革命分子として、かつまた日本のスパイとして逮捕された。残忍きわまりない拷問にかけられ、ありうべくもない「罪」を引き受けさせられ、命令によって幾千もの人びとが銃殺されたのだった。当時、日本が東北中国いわゆる満洲を侵略していたことと私たちブリヤートの受難とは全く無関係ではないのである。

●暗闇の始まり

私の父センゲと母ヤンジマーは一九二四年にブリヤ



センギーン・エルデネ。

ト・モンゴル共和国のヤローナという中心地から、オノン河の北畔に移住してきた。家畜の少ない貧しい家庭であった。

一九三八年の春になった。私は九歳だった。四月の中旬だった。私の生まれたセルーン・ガルトタイという谷は、まさにモンゴルとロシアの国境に位置し、山には木々がしげり、草は丈が高く、河川や湖沼の多いハンガイ（森林ステップ）の地である。国境の北側の遠くないところに金を捜すロシア人たちのキャンプがあり、およそ春ごとにそこから出火し、それがわが谷に延焼した。

その年の四月中旬もまた大きな山火事が春の白い干し草に燃え移ってきて、わが父はその火を消しに出かけたのだった。煙のなかに太陽が鈍く光り、山々がもやにつつまれてぼんやり見える、暖かい日、私が西の山で子ヒツジたちを放牧していると、淡黄色のウマに乗ったわが父が鉄砲をもった二人の男を連れて家へ向かって行くのがはつきり見えた。急いで家へ駆けて帰ると、緑色の帽子をかぶった内務省の二人が父を逮捕してきたのだった。そのまま、父は淡黄色のウマに乗って山火事の煙たな

びく薄い雲の中に消えた……。

あれから五六年たって、私はモンゴル国の高等裁判所の軍委員会などから「名誉回復証明」というちっぽけな白い紙をもらった。内務省の文書館において父を取り調べた文書を見ると、一九三八年の五月上旬に二度取り調べた結果、日本のスパイであるという嫌疑を認めたので、特別委員会の命令により二七日にヘンティ・アイマグ（県庁所在地）で銃殺した、とあった。

文字もまったく知らない一人の貧しい牧民に日本のスパイという罪を着せて銃殺するなどとは、およそ理解しがたいことである。この不幸な時代、私の父と同様に草原に暮らすつましい人びとや、チベット語の経文を覚える以外に何の罪もない僧たちが幾千人も銃殺されたのであった。

私の幼少時代はこのように暗黒のなかに過ぎた。受難の時代を戦争の時代が受け継いだ。

私は一九四三年に故郷のソムの小学校を卒業して、秋には軍の士官学校へ入学した。第二次世界大戦の真最中である。もともとアイマグ（県庁所在地）の中学校に配されてはいたけれども、軍学校なら衣食を支給してもらえたと噂に聞いて、故郷の数人の子どもたちと一緒にアイマグにある軍の支部に赴き、軍の学校に派遣してほしいと

頼んだのであった。衣食というのは、父から取り残され、すべての財産を没収された私にとって、何よりも大切なものだった。

全モンゴル人にふりかかった受難のこの時代に、わがブリヤートはまったく疲れはてていた。一九三八年の夏、反革命分子の牢屋となったわが家の家畜や財産は没収された。モンゴルへ移住して一〇年あまりがたち、ようやく生計が成り立つほどの家畜を維持しはじめたというのに。その夏、わが家のすべてのものはかき集められて、たった一頭の母ウシとその子ウシ、一頭の老いたウマだけが残された。セルーン・ガルトタイに任んでいたおよそ一〇〇戸のブリヤートの多くは、このように家畜や財産を没収されて、広々とした谷は数少ない家畜が草をはむ以外には何も無い空っぽの土地となった。わが故郷唯一の信仰拠点であったセルーン寺院も、ただジョンガーという名（ジョンゴルともいう）の赤い嘴くちばしの黒いカラスが集まるだけの空っぽの場所となって取り残された。

●暗闇のなかの一筋の光

一九四三年といえは、生活はますます苦しくなった。世界大戦の四年め、モンゴルはソ連の「最奥部」に変わってしまったのである。

すべてを前線へというスターリンのスローガンを実行

すべく、わが牧民たちは、戦っている赤軍に対して数千トンの肉、おびただしい数の馬群、暖かい靴や衣服などを送らねばならなかった。それらを積んで前線へ向かう列車の列は「贈り物の行列」と名付けられたものだ。ただロシアの支援だけを頼みに従属的な状況にあった当時のモンゴル国が、前線への背後供給地になってしまったのは道理である。

そういうわけだから、一九四三年になると、草原の牧民たちは衣服を作る布も、食べる穀類も、吸う煙草さえもすべてのものに不足し困窮することとなった。私もまたウランバートルに出て軍学校に赴いたときには、先のとがった穴のあいた革製ブーツを履き、つぎはぎだらけの薄い布の上着を身につけていたのである。

のちに私は「最奥部」という一つのエッセイを書いた。概して私は多くのエッセイ、短編小説、長編小説において、このような一九三〇年代、四〇年代の過酷な時代の状況や当時の人びとの受難の運命を反映させている。言い換えれば、私のあの幼少時代が私の心にきわめて深い傷を残し、のちに思考力が身につくや否やその傷が再発し、回想が目覚め、当時の様子を人びとに蘇らせるために、筆と紙とを合わせることに相成ったのである。

三〇年代は、このような苦難、困窮、苦痛、受難のな

かで過ぎ去ったけれども、「文化的革命」とよばれた、すべての人びとに文字をさずけんとする識字運動によって、牧民の子どもたちは教育文化の道に入り、モンゴルの新しい知識人となってゆくのである。

私の場合、七歳から「赤い家」とよばれる地元の文化センターで文字を教えてもらい、モンゴル文字を知ることとなった。苦しみのなかで、子どもは早く悟るものだ。一〇歳くらいになると一人前になるべきである。母は、もはや末っ子となってしまった私を、父の跡を継ぐ唯一の男子であると論したので、私は、わずかな家畜のために草を刈ったり、森に入って薪を用意したり、男のなすべき仕事はすべてしなければならなかった。しかし、私を牧民にして故郷に残すことから皮肉にも「救った」のは、少ない家畜をすべて没収されたことだろう。

わがブリヤートの寡婦かふとなつてしまった母たちにとつて、子どもを学校へやること以外に選択はなかった。こういった事情から一九四〇年代から五〇年代の初めにかけて、モンゴル国の医師、教師、技術者などの多くがブリヤートだったのである。そこからブリヤートのことを「モンゴルのブルジョア」「モンゴルのユダヤ」といった言い回しが生まれた。

一九三九年の秋、私は一〇歳でソムの小学校へ上がった。

た時、すでに読み書きができ、四則演算のできる「立派な男」だったものだ。小学校で私は読書好きの少年となつた。身体は弱々しく、孤独を好み、粗野で貧弱な私にとつて本ほど良き友はなかつた。あの一九三〇年代末に、フランス、ロシア、ドイツなどの古典的名作が次々と翻訳され出版されたことは、なんとすばらしいことだつたか！

幼い頃から一人で物思いにふける性格だつた私は、まさしくあの時代に、いつかきつとこんなすばらしい本を書きたいのだとあこがれ、こがれたのだつた。

人の生活と環境とのあいだの關係について幼い頭で思ひめぐらし、悲しみを他人からまったく隠し、目には涙を、心臓には傷をもちながら歩んだあの時代こそが、私の後の性格、思想、願望の礎を築いたのは確かである。

人は幸せを一人で味わうものだが悲しみは分ける生き物である。だから、人びとに伝えるための多くの言葉が、私の中でめぐりはじめた。「男は成長してフェルトを伸ばす（いまは小さくてもいつかは立派になる）」ということわざにあるとおり、苦しみを経験した幼少時代を私は背後に捨てて、一人前の男になるまでちょうど半分くらいまでできたところで、厳しい秩序のある軍学校が私に男になる試練を簡単にほどこしてくれた。

士官学校では、普通の一〇年制学校のカリキュラムに基づいて一般教育をさずけるとともに、軍の教育も施していた。ウランバートルの優れた教師たちに軍長の制服を着せて教壇に立たせ、またロシア人教師も教壇に立つた。私たちはわずか二年でロシア語が読めるようになった。こうして私はロシアの有名な作家プーシキン、チェホフ、ゴーリキーなどの作品を原語で読んだのである。

●光り輝いた時代

第二次世界大戦が終わり、平和の太陽が昇つた。私たちにも太陽が昇つた。個人経営の遊牧民の生活水準が決して悪くはなかつた時代である。

三八歳で未亡人となつた母と、一九三九年にハルハ川戦争に従軍して翌年に退役してきた二人の兄は、四六〜四七年頃になるとようやく生計が維持できるほどの家畜を放牧するようになった。概して、戦後復興のスローガンのもとで大衆を動員した大労働の時代であつた。政治状況も穏やかで、人びとには将来の幸福を信じる気持ちが強まつたものである。

まさにこのような頃から、私の精神に文学的な最初の言葉たちが生まれた。一九四八年、『青年作家選集』という本に私の最初の幾篇かの詩が発表された。ヤボーホラン、ガイタブといったやがて有名になる詩人たちも

ようど同時代にデビューしはじめた。しかし、私の場合はまもなく文学の別のジャンルに「裏切り」をした。

一九四九年の夏、私は士官学校を卒業し、国立大学の医学部に軍医として就職した。ところが、翌年には軍の大規模な人員整理によって解雇された。一九五一年から中央の新聞雑誌に評論を書くようになり、一九五四年、『風そよぐ川のほとり』という最初の短編小説を「ツォグ（灯火）」という雑誌に載せたのが、私の文学的長い道程の真の始まりとなったのだった。

一九五五年に医者への免許を抱いて、首都の精神病院（モンゴル唯一の精神病院）で医師となった。ここで四年間、精神を病んだ人びとを癒そうと努力したことで、善良な医師の一人にはなったといえよう。またこの四年間は私にとって、人の苦しみをよりいっそう理解し、人生を知るうえで大いに役だった。

この時代に私の最初のエッセイ集が出版され、人びとの注目をあつめた。私は作家として世に出た。一九五六年に私の最初の本が出版された。こうして五〇年代の末から六〇年代にかけての一〇年間は、私の人生にとって、そしてモンゴルの国民生活にとっても、最も活力のある創造的時代の到来だったのである。あの一〇年をモンゴルの文化や文学の発展の黄金時代と名づけてもよか

ろう。

戦後の傷は癒えて、国民生活も向上した。四〇年代の末に始まった共同化運動は、本当に人民の中から生まれた運動という様相をもっていた。人びとを去勢し、縛りあげる社会主義経済の中央集権体制はまだ形成されていなかった。

人びとは、ロシアやモンゴルでただ一人を崇拜した受難の暗黒時代の真実をくまなく捜し、あのような残酷で破廉恥な行為を批判した。とりわけ芸術家や知識人たちにとって、自由と権利の味を実感した時代であった。

「革命の反逆者」とされたブリヤートの息子である私もまた、ようやく一人前となり、もつとも幸福だったあの一〇年のあいだに、活力ある青春のほとばしりを著作に向けたのであった。

【解説】

センギン・エルデネは、一九二九年、ヘンティ県の遊牧民の家に生まれた。本稿にあるように、旧ソ連のブリヤート自治共和国から南下してきたブリヤート人であるため、スターリン時代に辛酸をなめた。

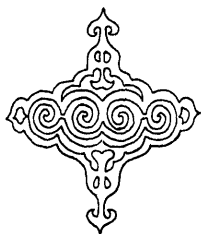
一〇代から詩を書きはじめ、一九五六年に『草原行』という最初の詩集を出版し、短編小説も刊行された。以

後、短編小説の名手として知られている。

一九六五年に、モンゴル国の文化勲章に相当する国家章を受章。一九九四年には国民作家勲章を受けた。この受章は、故ダムディンスレンに続いて二人目であり、現存する作家としては唯一である。

一九五一年に結婚し、娘一人息子四人をなし、現在、孫一〇人に恵まれている。なお、長男のバトゥールはモンゴル民主党の党首であり、一九九〇年の春の民主化運動において主要な役割を果たした人物である。

(小長谷有紀)



●考古學

遺跡の宝庫、モンゴル

林 俊雄

●遊牧民の舞台

もし手元に地図帳があったら、ユーラシア大陸全体が載っているページを開いていただきたい。大陸の中央部や北よりを、西から東の方へ見ていくと、ヨーロッパ東部のハンガリー、ルーマニア、黒海北岸のウクライナ、北カフカス、カスピ海北岸、ウラル山脈南部、カザフスタン、中国新疆ウイグル自治区北部、アルタイ山脈、トウワ、モンゴル高原、中国内蒙古自治区、そして中国東北地区（旧満洲）との境をなす大興安嶺山脈に至るまで、南北の幅約二〇〇〇キロ、東西の広がり一万キロにも達する広大な草原地帯が広がっている。ここはかつて幾多の遊牧民が興亡を繰り返した舞台であった。

古くは紀元前七〜四世紀に北カフカス・黒海北岸を根拠地としてオリエント方面にまで侵入したスキタイがいた。また、紀元前三世紀末から二〇〇〜三〇〇年間にわ

たってモンゴル高原を支配した匈奴きよびと、紀元後四世紀末にヨーロッパで大変動をもたらしたフン族（匈奴の末裔まごいではないかとも言われる）、六〜八世紀にモンゴル高原から天山南北をおさえてテュルク（トルコ）族の中央アジア進出の端緒を開いた突厥とつげつがいた。そして一三世紀には、真打とも言うべきモンゴルが現れ、ユーラシア大陸の大部分を勢力圏におさめた。

これらの遊牧民は民族は違っても（イラン系、テュルク系、モンゴル系など）、それぞれの時代にかなり共通した文化をもっており、草原地帯の東部でも西部でも同じような遺跡・遺物が見られる。つまり、東アジア世界とか地中海世界という言い方と同じように、「草原世界」とでも呼ぶべき一つの歴史世界を構成していたのである。モンゴル高原はあくまでもその草原世界の一部であり、従ってモンゴルを理解するためには、草原世界全体の歴

史・文化に対する目配りが必要だということになる。

●モンゴル高原とその遺跡

しかしモンゴル高原は、草原世界の考古学にとつて、二つの意味で他の地域よりもとりわけ重要である。一つは、多くの遊牧民の発展・拡大の源がモンゴル高原にあるということである。匈奴・突厥・モンゴルはもちろんのこと、スキタイの起源もモンゴル高原かその周辺とする説が最近は有力になりつつある。

もう一つは、他の地域に比べてモンゴル高原は遺跡の保存状態がよいという点である。私は最近一〇年間ほど草原地帯各地を探訪して、遊牧民の残した遺跡・遺物を見て回ってきた。草原地帯には定住地帯にあるような土壘や濠で囲まれた都市遺跡（ただしそれほど古いものはない）のほか、草原地帯特有の埋葬遺跡や祭祀遺跡がある。

それらは石や土を盛り上げた塚や石囲い、そのかたわらに立てられた巨石、さまざまな人間や動物を表現した石像などからなる。ところが草原地帯のとくに西部では農地化が進み、耕作にじまな石はかたづけられ、巨石や石像は割られてしまった。かろうじて石像のごく一部が博物館に保存されているにすぎず、石像が塚や石囲いと

ともに原位置に立っている光景を目のあたりにすることはほとんど不可能に近い。

ところがモンゴル高原ではそれらがまだ元のままの状態で残されているのである（ただし墓はかなり昔に多くが盗掘されてしまっているが）。その理由は、モンゴルではまだ人口の大多数が遊牧民であるため、多くの土地が草原として残されており、またモンゴル人は自分たちとは直接関係のない古い塚や石像にも敬意を払い、さらに地面を掘り返すことが嫌いだという点にある。

ここではモンゴル高原でもとりわけ重要な遺跡の集中しているオルホン川中流域を中心に貴重な文化遺産を紹介してゆきたい。

●モンゴル帝国の首都、カラコルム

現在の首都ウランバートルがモンゴルの政治・宗教的中心となったのは、それほど古いことではない。一七〇〇年頃、第一代のシェブツンダンバ・ホトクト（活仏）が、トール川北岸のこの地に定住するようになってロシアとの貿易拠点がおかれ、さらに一七五七年に清朝派遣の弁事大臣が駐在するようになってからのことである。一三世紀に世界帝国を築いたモンゴルが首都に定めた地

は、ウランバートルから西方へ約三五〇キロ、オルホン川とその支流フグシン・オルホンとが並行して南から北へ流れ、水と草に富んだ広大な平原を形成しているところであった。

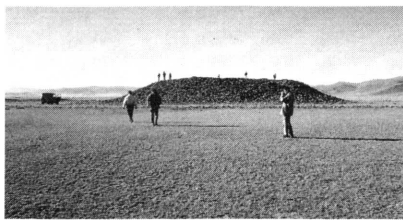
創業者チンギス・ハーンの死後、一二二九年に後継者に指名されたオゴデイ(オゴタイ)は、契丹人の耶律楚材ら官僚の建議を受けて、占領地の行財政の整備に着手した。そして政治・経済の中心として一二三五年に首都カラコルム(中国名は和林)を建設した。一二七一年にフビライが大都(現在の北京)に都を移した後も、モンゴル高原の中心都市として栄えたが、一三八〇年に明軍に攻撃されて炎上した。その間、とくに首都だった時期にはイタリア人修道士プラノ・カルピニのジョヴァンニ、フランス人修道士リュブリュキのギョームらが訪れ、ここが国際色豊かな商工業都市であったことを記している。

そこは現在オブルハンガイ・アイマグ北端のハラホリン・ソムの中心のすぐ北にある。目印は、長さ二メートル以上の巨大な石の亀である。これは中国で亀趺という石碑の台座である。中国では紀元後三世紀頃から石碑を亀の台座の上に立てるようになり、その風習が六世紀後

半にはモンゴル高原にも入り、突厥やウイグルの石碑もみなこの亀の台座の上に立てられた(ちなみにこの風習は朝鮮半島を経由して日本にも入り、とくに江戸時代に流行した)。

これまで「亀」と言ってきたが、よく見るとこの亀には耳が付いている。耳の生えた亀など現実には存在しないから、これは空想上の亀ということになる。歯は牙のように尖り、体のところどころからは火炎が立ち上がっている。なにやら怪獣映画に出てくるガメラのようにも見える。ガメラが炎を吐いてカラコルムを焼き尽くす光景が目につかぶようだ。なおこの「亀」の鼻先が黒光りしているが、これは炎を吐いたからではなく、大勢の人が油を塗り付け、撫でてきたからである。日本でもお地藏さんの頭を撫でたりするのと同じように、モンゴルの人たちは尊敬・崇拝の対象にしばしばこのような行為をする。

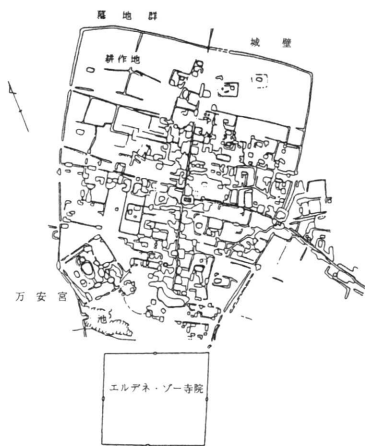
ところでこれだけ大きな亀趺であれば、その上に立っていた石碑もさぞかし大きかったであろうと想像されるが、残念ながら石碑は残っていない。ただし一九八四年に、この亀趺からほど近い「万安宮」(オゴデイ建設)の南門付近で花崗岩の石碑の断片が発見され、漢字一六文



モンゴル西部、ザブハン県イデル川上流の積み石塚。



カラコルムの亀趺。



カラコルム遺跡。1995年度作成。白石典之氏提供。



エルデネ・ゾー。手前のジープの横に亀趺が見える。

字が読み取れたという。これが巨大亀の上に立っていたものであるとも考えられる。今後本格的な発掘がおこなわれれば、貴重な発見がなされるかもしれない。

●カラコルムの発掘

実はカラコルムの遺跡は、まだ全面的に発掘されたわけではない。一九世紀末にロシアの調査団に発見されて以来、ソ連とモンゴルの調査団が発掘と測量をおこなっているが、なにしろ南北一・五キロ、東西一・一キロの広大な都市遺跡である。一見するとただ地面が凸凹して

いるだけのようだが、長く続く土手はかつての城壁であり、大亀趺のわきの窪地は池だったのである。基本的な構造はほぼわかってはいるが、細かい点になると、まだほとんどわかっていない。また周辺に関係する遺跡はあるのだろうか。

これらの問題に答えるべく、一九九五年から三年計画でユネスコが主体となり、日本の外務省が援助する形でカラコルムとその周辺の表面調査と測量が開始された。調査団の責任者は國學院大學の加藤晋平教授とモンゴル

側の研究者で、現場での作業は新潟大学の白石典之助手を中心に進められている。一九九五年八月末に現場で白石氏から直接聴いたところでは、従来のソ連の調査では曖昧・不明であった点がたくさんわかってきたという。調査結果の発表が待ち遠しい。

カラコルムが灰燼かひじんに帰してから約二〇〇年後、一五八六年にそのすぐ南に大きな寺院が建てられた。これが今でも立派な城壁をもつエルデネ・ゾーである。この寺を造るときに、すでに遺跡と化していたカラコルムから大きな石が建築材料として持ち出されてしまった。寺内にはもとカラコルムにあったペルシア語碑文がモンゴル仏教の石碑に転用されたものもある。カラコルムが遺跡としてはやや残り具合が悪いのはそのためである。しかしモンゴル帝国時代の政治的中心地がモンゴル高原の宗教世界の中心地として復活したことは、この場所がモンゴル人にとって重要な意味をもっていたことを物語っている。

●遊牧国家最初の都城

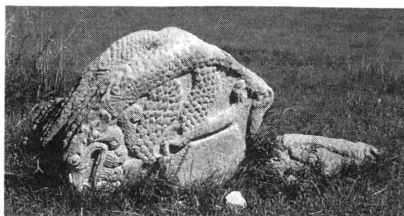
カラコルムからオルホン川左岸の平原を北に行くこと三〇キロ弱、地平線上に細長い平らな高まりと大小二カ

所のさらに高い隆起、ちょうど航空母艦のようなシルエットが浮かび上がってくる。これがウイグル可汗国（七四四〜八四〇）の首都オールドウ・バリック（遺跡名としてはハラバルガスンあるいはハルバルガス）の城砦址だ。

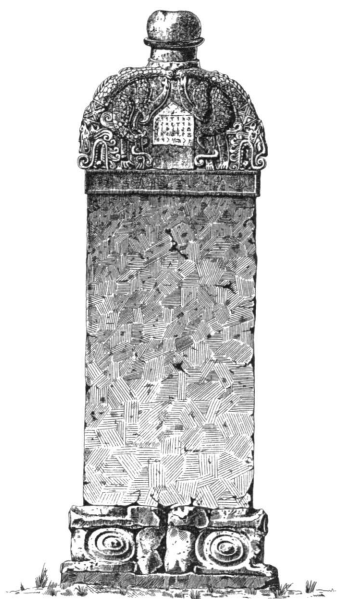
遺跡に近づくにつれて麦畑が広がってくる。だが雑草が多く、荒れ果てている感じだ。社会主義時代に農地化されたものが、その後管理が行き届かないのであろうか。ウイグル可汗国時代にも、オールドウ・バリックの周囲には農地が広がっていたと当時のアラブの旅行記にも書かれている。やはり昔からこのあたりは農耕に適した土地だったのであろう。

城壁の近くまでくると、地表の起伏がはなはだしくなり、何らかの建築遺構があることをうかがわせる。それも相当広い範囲に及んでいる。一九四九年にここを調査したソ連の考古学者キセリョフは、城外の都市域の面積を二五平方キロと見積っている。

城砦東南隅から南へ数百メートルのところにウイグル可汗国八代目の保義可汗（在位八〇八〜一一）紀功碑の断片がいくつか転がっている。一九九七年八月に調査団の一員としてここを訪れたとき私が目にすることができた



保義可汗紀功碑の上部断片。



保義可汗紀功碑。ヘイケルによる推定復原図。



オルドゥ・バリクの「物見台」と西壁・北壁。

のは、ソグド文やルーニックのテュルク文と漢文が刻まれた小断片約一〇点と石碑の頭部に当たる螭首ちしゅのかなり大きな断片（中央の五角形のスペースにはオルホン・ルーニック文字でテュルク語が刻まれている）、亀趺の断片などである。中央の五角形の頂点から石碑の端までが一・三センチあるので、本来の幅はその倍の二・六センチということになる。厚さも七三センチあるから、高さも相当なものだったろう。一八九〇年にこの石碑を調査したフィンランドのヘイケルが、高さは少なくとも六メートルはあつ

たろうと推定したのもうなずける。しかし彼の推定復原図にはやや疑問な点もある。まず、螭首ちしゅのてっぺんに丸い帽子のようなものがのっかっているが、このような例はほかにない。この丸い部分の断片は私も現地を確認したが、あるいは亀趺の一部かもしれない。また明らかに亀甲文が刻まれた断片が残っているにもかかわらず、復原図では台座が亀の形になっていない。キセリョフはこの碑文を墓碑銘と想っていたようだ。碑文が発見されたからには、この区域は都市の中で代々

の可汗の墓所であり、神域であつたらうと考えているのである。たしかに突厥のビルゲ可汗碑文などは墓に立てられたものであるが、ウイグルでは墓と関係なく紀功碑が立てられる。ここも祭祀の場所であつた可能性は高いが、必ずしも墓所とは言えないであらう。

●オールドウ・バリクの建設

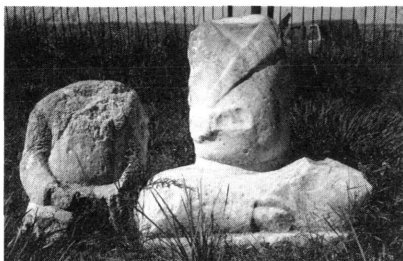
城砦のすぐ外側を、ほかよりも緑の濃い草のベルトがめぐっている。これは本来濠であつたところが埋まり、今でも水分を余計に含んでいるので草が密に茂っているのである。一八九一年にここを調査したロシアのラドロフの図面から判断すると、城砦の城壁は約四一五×三四〇メートルである。一九九七年のわれわれの簡単な測量によれば、長い辺が約四二〇メートル、短い辺が約三四〇メートルで、ラドロフの図面とはほぼ一致した。

この都城は三代目の牟羽可汗（七五九〜八〇）のときに建設されたが、二代目の葛勒可汗（七四七〜五九）のときに建設されたバイ・バリクはソグド人と中国人が建設に従事したことが碑文から知られている。ここではどうであらうか。城内の東南隅には、後述するようにひとときわ高い城壁で囲われた区画がある。このように長方形の城

内の一隅をより高くするプランは、イスラム化以前の中央アジア都市にもよく見られる。また唐風の熙蓮華文の瓦当（軒丸瓦の先端の円形の部分）も発見されている。やはりここでも、両者が設計・建設に深く関与していたのであらう。

遊牧国家に定住地帯出身の人びとが大勢いたとは思議だと思ふ人もいるかもしれないが、実は匈奴以来どの遊牧国家も定住地帯から略取・投降・勧誘などさまざまな手段で人を集め、行財政・軍事面から農耕・手工業の分野に至るまで広く彼らを活用していたのである。

北壁と南壁の外側には小さい塔が列をなしており、西壁の城門の外側には中国風と言えば甕城が付設されている。これは攻防の要である城門を二重に囲うことによつて強化するための施設である。城壁は現在でも高く残っており、七〜八メートルはあるようだ。私はユーラシア草原地帯でこれより新しい城砦址を数多く見てきたが、ここほど城壁がよく残っているところは見たことがない。城内の西壁寄りにこんもりと盛り上がった版築（土を少しずつ棒で突き固めて高くしてゆく技法）の塔がある。これをキセリョフは物見台としている（高さ一四メートル）。そ



ビルゲ可汗(右)と従者と思われる石像。



モンゴル西部、ザブハン県イデル遺跡(第一突厥)のバルバル列。



キョル・テギン碑漢文面。

の東側、城内のほぼ中央にやや小高い区画があり、ここには瓦が散乱している。残念ながら私は瓦当を見つけないことはできなかったが、キシリョフは蓮華文の瓦当をここで発見し、ここに宮殿があったと考えた。城砦の東南隅は一段高くなっており(キシリョフによれば高さ一二メートル)、内城(日本風に言えば本丸)があったと思われる。ここにも瓦が散乱しているが、キシリョフはここでも「宮殿」にあったのと同じ瓦当を発見している。このような本格的な都城を遊牧国家が自らの意志で造

ったのは、これが最初のことであった。ほぼ同じ頃、ユーラシア草原地帯西部の北カフカスでもテュルク系遊牧国家ハザルがヴォルガ河畔に都城を築くが、これは偶然の一致ではなく、同じ草原地帯の一連の歴史の流れの中で登場した産物と考えるべきであろう。

●突厥の聖地

ウイグル以前の遊牧国家にも、都城を建設しようとする動きがなかったわけではない。匈奴は方形の土塁で囲まれた砦や集落を造ったが、大規模な都城とはほど遠い。

ウイグルの直前の突厥ではどうであったか。

突厥は、唐に滅ぼされる前の第一突厥（五五二―六三〇）と、復興後の第二突厥（六八二―七四四）に分けられるが、この点でとりわけ興味深いのは第二突厥三代目のビルゲ可汗の治世（七二六―七三四）である。ビルゲは唐と定期的に大量に絹馬交易（突厥が唐にウマを売り、代価として絹を受け取る）をおこなうようになった。そうなると思易拠点としての都市が誕生しても不思議ではない。まさしくビルゲは都城を建設し、さらに仏教や道教の寺さえ造ろうとまで思い込むのであるが、重臣の諫言かげんによって思いとどまった。それを実現したのが前記のウイグルということになる。

ビルゲは都城こそ建設しなかったものの、小規模な建築物を造った。彼には信頼するに足る有能な弟がいた。

その名をキョル・テギンという。この弟が死んだとき（七三二）、ビルゲは立派な廟所びょうしよを造って弔った。彼自身もその三年後に殺されることになるが、彼のためにやはり同様な廟所がすぐ近くに造営された。これらを合わせてホシヨ・ツアイダム遺跡という。ハラホリンからフグシン・オルホン川の東岸を北へ行くこと四十数キロのと

ころにある。このうちキョル・テギン廟は一九五八年にチェコの考古学者イスルらによって発掘され、報告されている。その報告と私の実見とに基づいて述べてゆこう。

●ホシヨ・ツアイダム遺跡

廟全体は周溝と版築の土壁（六七・二五×二八・二五メートル）で囲まれており、東側に門があった。門の両側には石羊が置かれ、門を入ると亀趺があった（現在その頭部はなく、それ以外の断片が散乱している）。亀趺とその上の石碑を覆うように、四本柱で瓦葺きの屋根をもつ亭があったらしい。門から続く道の両側には石人が多数立っていたはずであるが、現在はあちこちに散らばっている。

さらに進むと方形の基壇があり、その上に方形の祠堂が建てられていた（今は礎石が残っている）。建物内部は二重構造で、内陣と外陣からなっていた。内陣の穴の中から、鷲のような鳥のマークを付けた冠をかぶった頭像が発見された。これはキョル・テギンの像と考えられている。

廟全体を囲む土壁の東側から、延々と三―四キロにわたって立石（今ではほとんどが倒れている）の列が続いてい

る。この立石をテュルク語でバルバルといい、中国側の史料によれば生前に殺した敵の数だけ立てられたという。

●突厥の碑文

遺跡の概要のほかに、碑文についても触れておかなければならない。突厥は草原地帯の遊牧民の中では、最初に自己の文字をもった民族である。第一突厥ではもっぱらソグド語が公用語として用いられていたらしいが、第二突厥では新たに作り出されたオルホン文字で、自らのテュルク語を表記するようになった。

中国周辺諸国のうち、たとえば朝鮮半島や日本、ペトナムでは漢字やそれを改良した文字が長く使われたが、中国の北方や西方の諸国では常に漢字とはまったく違う体系の文字が使われた。これは圧倒的に巨大な中国文明に呑み込まれないようにという配慮からであろうか。オルホン文字の起源についてはソグド文字とする説とテュルク民族独自の発明とする説があり、決着がついていない。

石碑は現在直接地面に立てられている。一面に漢文が、他の三面にオルホン文字でテュルク語が刻まれている。

漢文は唐の玄宗が起草した文章で、テュルク文はビルゲ

の語った言葉が記されている。興味深いことは、漢文の方がキョル・テギンを誉め称える外交辞令的な文章であるのに対し、テュルク文の方は突厥の歴史と配下の人びとに与えた警告とからなっていることである。その警告とは、中国人の甘言に乗せられることなく、この地を本拠として交易に努めよというもので、一種のナシヨナリズムが強調されている。文字だけでなく、内容も民族としての独自性を表しているのである。

モンゴル高原に広がるこれらの遺跡は、まだほとんどが発掘調査されておらず、その意味や年代についても不明な点が多い。最初に述べたように、これだけ各種の遺跡がよく残っているのは今やモンゴルだけであるから、なんとかこれらを保存し、代表的なものを選んで発掘することが期待される（一九九八年からトルコ共和国の調査団がホシヨ・ツァイダム遺跡の調査を開始する）。

変革をうつつしたす鏡——教育の再生

コラム

二木博史

作家の椎名誠が監督した映画『白い馬』（一九九五年）は、夏休みに故郷の家にもどった少年のひと夏の物語だった。遊牧民の子どもは、親元を離れ寄宿舎で生活する。遠い町での暮らしは、早くから独立心をやしなううえでは利点があるもの、おさない子にとっては、やはり時にはさびしくつらい。小学校入学が八歳からとなっているのは、この寄宿舎制度とおおいに関係がある。

一九九四年の九月の初めに教育調査でトウブ県のセルゲレン郡を訪れたとき、学校の寄宿舎も見学した。部屋のなかにはベッドや戸棚などがおかれ、六人から八人が生活できる

ようになっていく。必ずしも同じ学年の生徒が一緒に住むということではなく、兄弟や姉妹が同じ部屋にはいつているケースもあった。朝昼晩の正式な食事のほかに、午前、午後のおやつ時間ももうけられていて、食べることに關しては、あまり問題がないようにみえた。

『白い馬』の主人公ナランは、夏休みが終わると学校にもどるが、現実には、新学期が始まっても故郷の家にそのままとどまる子も相当多い。社会主義時代にはなかったドロップアウト（不登校）は、深刻な社会問題になっている。トウブ県の担当者

うち、学校へかよっているのは八〇％程度で、全体の二〇％（約六〇〇〇人）が学校へ行っていないという。

ドロップアウトの要因としては、牧畜方法の変化によって人手がたりなくなり、子どもが家畜の世話をするようになったこと、社会主義時代には、教科書代などをのぞけば教育は基本的に無償だったのが、事実上、一部有償になったこと、子どもをなにか強制的に学校へ通わせるやり方が、もはやとられなくなったことなどがあげられる。

友人の一〇年制学校の物理・数学の教師は民主化のはやい時期に、一種の選挙で校長に選ばれた。首都か

ら四〇〇キロ以上南の町に住むこの友人は、一年に何度か文部省をおとすれ、校舎の修理や設備の導入について、大臣や次官と直談判する。現在のところ、文教予算は、地方の学校の予算にいたるまでほとんどすべて、中央政府によって管理されているからだ。

安月給にいやげがさして職場を去った先生の補充も、校長先生の頭をいつもなやませている問題だ。ウランバートルでは、優秀な教師は学校

をやめ、わりのいい家庭教師をして生活している。

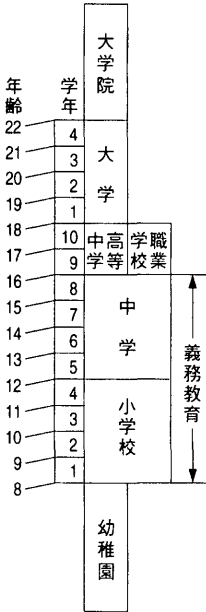
社会主義時代、モンゴルのエリートも多くは、ソ連や東ヨーロッパの大学へ留学した。首都の教育熱心な親たちは、ロシア語のみで教育するロシア語学校に子どもを入学させたがった。一九八〇年代の一時期、大学の講義の大部分をロシア語でおこなう試みさえなされた。

民主化とともにロシア語学校の大部分は閉鎖され、モンゴル語で教育

する普通の学校にかわった。英語がいまやロシア語にとつてかわりつつある。ロシア語教師は、短期間で英語をマスターし、英語の先生になった。

大学の授業から「科学的共産主義理論」「ソ連邦共産党史」などのイデオロギー教育の科目が姿を消し、そのかわりに「モンゴル文字」や「民俗学」など、民族の伝統の再評価と関連のある科目がつけられた。

私立大学の設立ラッシュも注目される。わずか五年たらずのうちに、三〇以上のさまざまな私立大学がつけられた。それらの多くは、学生数も少なく、スタッフも設備も貧弱な名前だけの大学だが、一部の新設校はすぐれた建学理念をもち、将来の発展を予測させる。



モンゴルの学校制度

- 注
1. 小学校は7歳入学も可能
 2. 医科大学は6年制
 3. 大学は修士課程1年半、博士課程3年
 4. 幼稚園は3歳で入園、5年間かよう

●モンゴル人

ハンモンゴリズムの現在

二木博史

●フフホトのモンゴル学書店

内モンゴル大学と内モンゴル師範大学は、中国の内モンゴル自治区でもっとも有力な大学であり、師範大の裏門から内モンゴル大前の大通りに通じる路地は、モンゴル料理店が何軒かみられるなど「漢人の町」フフホトでモンゴルの雰囲気のもっともつよい場所だ。

ハダー氏の経営する「モンゴル学書店」は私が初めてフフホトを訪れた一九九三年の春には、師範大学の裏門前にあったが、九五年夏に二度目に訪れたときは、このせまい路地の中間あたりに移っていた。ハダー氏は、年齢は四〇歳前後で、師範大学の歴史科を卒業したという。哲学に関する論文をいくつか漢語で書いている奥さんもモンゴル人だが、モンゴル語はあまり上手ではない。

この店は、中国で出版されたモンゴル研究に関する書籍を専門にあつかう書店で、フフホトへ行ったモンゴル

研究者のほとんどが、一回は訪ねる場所になっている。

私の研究室にある中国出版のモンゴル語、漢語の文献の多くは、ハダー氏の店で買ったものだ。日本の中国関係の書店で売られる内モンゴルの出版物は、実際に出版されているものの十分の一にも満たないので、研究者は現地へ行って直接購入するほかはない。

外国人研究者は「モンゴル学書店」のいい顧客だが、日常の客はもちろんモンゴル人である。この店は、モンゴル関係の書籍に関する情報交換の場であり、アカデミックな機関を別にすれば、中国におけるモンゴル文化を守る最後のとりでのような存在だ。

このハダー氏が民族主義者グループの指導者として逮捕されたというニュースは、私にとってたいへん衝撃的だった。一九九六年二月二日付「読売新聞」は、ニューヨークに本部をおく人権団体「中国人権」の発表を引用

するかたちで、数百人で構成される組織「南蒙古民主連盟」の主席ら八人が、前年一二月に反革命行為などを理由に逮捕されたことを伝えている。同紙によれば、八人の逮捕に抗議するデモがフフホトで二度発生し、二回目の二〇〇人規模のデモでは、チンギス・ハーンの肖像画もかかげられたという。

ウランバートルで発行される旬刊紙「イル・トプチョー」は、内モンゴルにおける反体制運動をフォローする新聞として知られる。同紙の一九九六年六月一一―二〇日号は、内モンゴル自治区の公安当局がハダー氏の家族に送った「通知書」のコピーを掲載した。この「通知書」によると、ハダー氏は「政府転覆を企てた罪」「国家を分裂させようとした罪」「反革命集団を組織し指導した罪」の三つの罪によって、同年三月に起訴された。

ハダー氏らが具体的にどのような活動をおこなったかはわからないが、それがどのようなものによせよ、彼らの逮捕が内モンゴルの知識人に与えた影響の大きさは、はかりしれない。

●内モンゴル人のたたかい

中国共産党や公安当局は、これまで何度も内部通達と

いう形で、民族主義運動に対する警戒をよびかけ、同時に民族主義者に警告を与えてきた。一九九四年二月に出された、内モンゴル党委員会の内部通達は、民族問題に関する三種類の文書を下部で検討するよう指示している。このうち「党中央委が内モンゴルに関して出した指示の実施について」と題する文書は、「人権」や、「民族の独立」や「三つのモンゴルの統一」などの運動はすべて内外の敵が、わが国を分裂させようとしておこなっている活動で、人民の利益に「反する」と述べ、さらに「内モンゴル自治区の少数民族の分裂主義者たちは、外国の敵対勢力と共謀し、ダライ・ラマや新疆（しんきやう）の分裂主義者たちと結び、民族を分裂させるさまざまな組織を国の内外につくり、破壊活動をおこない、内モンゴルを祖国からきり離して、「大モンゴル国」をつくろうと企んでいる」と警告している。

同文書はさらに、一九九三年一二月、チーフエン（赤峰、モンゴル語でオラーンハダ）のモンゴル語師範学校に「モンゴル統一委員会オラーンハダ支部」という非法組織ができ、モンゴル統一のための活動をおこなっている例など、民族主義者の活動の事例を多数あげている。

「オラーンハダ支部」から出された「モンゴル人の兄弟たちへの書簡」には「将来、中国内部が混乱すれば、ロシアがソ連から独立したように、われわれも中国から独立する」と述べられているという。

右の「三つのモンゴル」とは、モンゴル国と中国領内モンゴル自治区とロシア領ブリヤート共和国を指す。パシフィックリズム（汎モンゴル主義）のいちばん分かりやすい形はこれらの統一だが、現実問題として、国境の変更による新しい国家の建設は、もはや不可能である。

世界のモンゴル人の総人口は八〇〇万人近いとされるが、その約半数は中国の内モンゴル自治区に居住している。名称は「内モンゴル自治区」でも、漢人とモンゴル人の人口比は五対一で、モンゴル人はマイノリティの地位に甘んじている。一九四七年に内モンゴル自治区がつけられたときに約束されたモンゴル人の自治は、結局実現しなかった。

しかし、万里の長城より北は歴史的に北方の遊牧民族の土地であり、せめて内モンゴルの一部でも純粹にモンゴル人の土地とよべるような状態にしたいと多くのモンゴル人が望んでいるのは事実だ。内モンゴルの民族主義

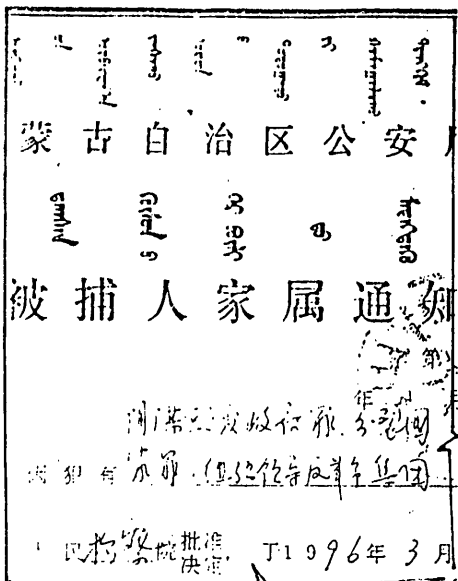
者の一部が、「内モンゴル自治区」の名称を「内モンゴル・モンゴル民族自治区」に変えるよう要求しているのにも、それなりの理由がある。

ハダー氏らの反体制活動の実態は今のところ不明だが、それが内モンゴルでくりかえされてきたモンゴル民族擁護の運動の延長線上にあることは確実だろう。

●ブリヤート人の苦難

一九七九年の一月のはじめ、私は二年余のモンゴル留学を終え、中国経由で帰国した。中国へ入る直前、国境の町ザミーンウードで、アンケート調査をうけた。その日はちょうど、モンゴルで一〇年に一度実施される国勢調査の日に当たっていたのだ。このときの国勢調査の結果は、一九八三年に統計集の形で出版されている。この資料集を見ると、モンゴル国籍を有するものは、人口の九六・五％、外国籍が三・五％になっている。

モンゴル人は、モンゴル語で「ヤスタン」とよばれる下位カテゴリーでさらに分類される。前記の統計集には、約二〇の「ヤスタン」の名前があらわれる。この「ヤスタン」は日本語にしにくいが、文化人類学で用いる「エトノス」の概念にあてはまると、一応考えてよい。



ハダー氏の家族に送られた「通知書」。

モンゴル人は一六歳になると、政府発行の身分証明書を持つようになるが、これにも「ヤスタン」記載の欄がある。テュルク系の民族集団を別にする、日本でいえば、「信州の人」と「薩摩の人」程度の「ヤスタン」の違いをなぜ強調しなければならないのか、よくわからない。おそらく過去においては、行政上それが必要とされたのである。「ヤスタン」のうち最大の集団はハルハ

人で、人口全体の七七・五%をしめる。

ブリヤート人は約三万人で、「ヤスタン」の中では、四番目に大きい集団だ。彼らの大部分は、ロシア十月革命後にロシア領からモンゴル領に避難してきた人びとやその子孫である。ロシア革命後の内戦の時期、バイカル湖の東のザバイカル地方は一時、白軍の支配下におかれた。当時のブリヤート人の自治運動の指導者は、やむを



ブリヤート文化協会の発行した「オガイ・ベンシク」紙。

えず白軍のアタマン・セミョーノフと協力関係をつくりあげた。シベリアにポリシエヴィキ政権が確立されると、ブリヤートの民族主義者の一部は、モンゴルに活動の場をうつした。

一九二〇年代末から、モンゴルに住むブリヤート人に対する迫害が始まった。一九三〇年代後半の大粛清の時期には、ブリヤート人全体を敵視する、独裁者チョイバルサンの指示がだされ、ブリヤート人であるという理由だけで、多くの者が投獄、処刑された。

一九九〇年の民主化後、ブリヤート人知識人は、自らのアイデンティティを再確認するための運動を展開した。そのひとつのあらわれは、「ブリヤート文化協会」の結成（一九九二年二月）と機関紙「オガイ・ベシエグ」の発行である。「オガイ・ベシエグ」はブリヤート語で「系図」を意味する。ブリヤート語をタイトルにすることで、ブリヤート文化をきわ立たせようとしたことは、言うまでもない。

同紙の創刊号（一九九一年四月）の第一ページは、ブリヤート出身の偉大な啓蒙思想家・政治家・学者ジャムツァラーノの紹介にあてられ、他のページには、ブリヤート

ト人の婚姻儀礼、フブスグル県における粛清に関する記事などが掲載されている。

モンゴルのブリヤート人は、ロシア連邦内のブリヤート共和国の住民と共通の「ブリヤート人」としての帰属意識と、「モンゴル人」としての帰属意識をあわせもち、状況によってそれらを使い分けているとみることができよう。

●全モンゴル人の「祖国」モンゴル

今世紀にモンゴルへ移住したのは、ロシアのブリヤート人だけではなく、内モンゴルやフルンボイルや新疆からも多数の集団や個人が国境を越えた。

前項でふれた「ヤスタン」のリストをみると、一九七九年一月現在、バルガ人とウジュムチン人の数は、いずれも二〇〇〇人である。この二つの集団は、一九四五年の秋・冬に中国のフルンボイルや内モンゴルから移住してきた人びとである。

一九四五年八月にソ連軍とともに内モンゴルへ進軍したモンゴル軍は、内外モンゴルの統一をよびかけるピラをばらまいた。ヤルタ協定によって認められたのは、モンゴル人民共和国の独立のみなので、最初から内外モン

ゴルの統一は無理だった。にもかかわらず、このような宣伝がなされた理由は、現在でも完全には説明されていない。いずれにせよ、短期間国境が開かれ、多数の内モンゴル人がモンゴルへ移住した。モンゴル国境に近いシリンゴル盟の東ウジュムチン旗の人びとは、旧領主ドルジにしたがい、一九四五年の末に国境を越え、ドルノド県に新しい郡を与えられた。同じ時期にフルンボイルのバルガ人は、元満洲国軍大佐シャーリーボーにひきいられて、二〇〇戸がモンゴル領内に移り、やはりドルノド県のフルンボイル郡の住民になった。

世界のテュルク系の人びとにとって、トルコ共和国が特別な意味をもつと同様、かつてのモンゴル帝国の首都カラコルムを擁するモンゴルは、国外に住むすべてのモンゴル人にとって心の「祖国」であり、戻らべき土地だ。今後モンゴル国を目指す移住者の列はとぎれないであろう。

●世界モンゴル民族大会

一九九三年の九月にウランバートルで、オチルバト大統領も出席して、世界モンゴル民族大会が開かれた。ロシアのブリヤートとトゥワから正式の代表が派遣された

ほか、アメリカ、フランス、インド、ネパール、台湾等の代表も出席した。中国の内モンゴルからは、数人が個人の資格で参加した。

この大会で「世界モンゴル民族連盟」が結成され、ブリヤート系モンゴル人のビヤムバスレン元首相が議長に就任した。

同大会で採択された「全世界のモンゴル人へのアピール」は、モンゴル文字の復活の支持、「共通の文字」による連帯の強化をうたうとともに、仏教の国教化にも言及している。これらの表現からは、文字や宗教によるモンゴル民族の文化的統合の考えをよみとることができる。やはり大会で採択された別の文書は、現在の国境線を認めたいうえで、国外のモンゴル人のモンゴル国への移住を促進するための法的整備をおこなうよう、国に要求している。

すでに前年の秋には、やはりブリヤート系の著名な作家センギン・エルデネが、オチルバト大統領に対して、モンゴル系諸民族の文化的関係を強化するための非政府組織をつくること、ブリヤート人と内モンゴル人に優先的に土地をリースすることを提言している。

この当時、モンゴルの全人口の約5%をしめていたカザフ人の新生カザフスタンへの移住が積極的におすすめられ、数万人のカザフ人がモンゴルから出国した。

いわばこれと同じようなモンゴル人の移住の推進を大会は求めたわけだが、現実には、その実施は大きな壁にぶつかっている。モンゴルに住む一般のモンゴル人は、中国から「純粋なモンゴル人」でない者、もつとはつきりいえば、漢人や、漢人とモンゴル人の混血の者が「モンゴル人」の名のもとに入ってくることに對して、強い警戒心をいだいている。このため、内モンゴル人のモンゴルへの帰化の審査は、たいへんきびしいものになっている。

「世界モンゴル民族連盟」の活動が、その後、具体的な進展をみせていない最大の理由は、中国への遠慮である。中国との関係を悪化させてまで、中国内のモンゴル人の問題にコミットする気は、モンゴル政府にはない。もつとも、宗教問題に関しては、その態度は少し異なり、中国側からの圧力にもかかわらず、チベットの大ライラマは毎年のようにモンゴルを訪問して宗教活動をおこなっている。

「世界モンゴル民族連盟」の活動状況にあきたらない人びと、とくに内モンゴル出身者が、「世界モンゴル民族文化協会」を一九九五年の一〇月に組織した。

私のもとにも送られてきた、一九九六年三月に発表されたアピール（モンゴル文字）は、モンゴル国のモンゴル人が今後とも民族として残れる可能性をもつのに對し、他の地域のモンゴル人は、その民族的特性を失い、滅亡の方向にあることを指摘したうえで、モンゴル人が過去につくりだしたさまざまな文化を研究・紹介して後世に伝える仕事を、国境のわくを越えて進めるよう、世界のモンゴル人とモンゴルを支援する人びとによびかけている。

同協会は、モンゴル民族の文化的統合を果たし、その後で次の段階を考えるという戦術をとっている。現在のところ、パンモンゴリズムの進む道は、これ以外にありえないだろう。ただ問題は、中国がこのような戦術に對して極度の警戒心をもっていることで、国境を越えたモンゴル人どうしの交流は、文化的レベルのものでさえ、順調には進んでいない。

風土病。ベスト

小長谷有紀



犬の助けを得て、タルバガンを狩る若者。

毎年、発生するベストはモンゴル高原の風土病である。一七世紀にヨーロッパをおそった黒死病の恐怖は、一般にモンゴル軍の西方遠征による「東西交流の産物」とされている。ベスト菌を媒介しているのはノミであり、そのノミはタルバガンとよ

ばれる草原モルモット(Marmota Sibirica Radde)に寄生している。したがって、狩猟の際に死んだタルバガンから殺した猟師へとノミが引越しをすること、それが最大の感染原因である。人とノミと齧齒動物の出会いが草原で脈々と息づいているために、ベストもまた風土病として生きていく。

ただし、多くのモンゴル人はタルバガンの肉を食べることによって感染すると思っている。また、感染から身を守るためにはアルコールが効くと信じられている。たとえば、ベスト発生地区へ赴く医師は、たとえ

下戸であってもわざわざアルコールを飲用しなければならないという。

正しい理解をもたないままに、それでもこの病とともに長年にわたって生きぬいてきた人びとは、とりあえずベストが発生すると当該地域を閉鎖する。移動を禁じることで被害を最小限にとどめるのである。きわめて単純明快なこの防疫方針が、一九九六年夏、中国人の持ち込んだ食料によって発生したと噂されるコレラに対しても応用された。

だから、旅ゆく人は全身を耳と化して情報収集に努めなければならないのである。

●政治

民主化への道のり

松田忠徳

●人民革命党の敗北

「われわれは、外国（清王朝と旧ソ連）の支配と（モンゴル人民革命党の）一党独裁の圧力の下で約三〇〇年暮らしてきた。今、やっと自由に生活できる時代が訪れた」

一九九六年六月三〇日、マルクス・レーニン主義を放棄した新憲法下での二度目の総選挙で三三議席を獲得し第一党に躍り出た民族民主党のTs・エルベグドルジ党首（三三歳）は、こう勝利を宣言した。それは一九九〇年春、アジアで最初に社会主義体制を崩壊に導いた民主勢力が、民主化後六年目にして、ついに共産党（人民革命党）の手から政権を奪取した瞬間でもあった。

ロシア、東欧の旧社会主義諸国で共産党が勢力を回復する兆しを見せるなか、モンゴルのこの激的な政権交代をいったいだれが予測しただろうか。当の民族民主党と社会民主党を中心とした共闘組織「民主連合」ですら、

これほどの圧勝は計算していなかったはずだ。選挙戦に入る直前の同年五月上旬、エルベグドルジ党首は私に、「地方組織も、資金も今回は万全だ。二六議席以上獲得できれば勝利」と語っていた。

ちなみにこれは院内交渉権を得られるぎりぎりの数字を指している。一院制、定数七六の国民大会議（国会）の議席中、六議席しか持たなかった野党・民主勢力にあって、エルベグドルジ党首のいう二六議席獲得は、与党・人民革命党（共産党）との連立政権樹立、そして四年後、二〇〇〇年の総選挙における勝利への第一歩と考えても不思議はなかった。

しかし、だからといって一気に政権交代を可能にした今回の選挙結果を、日本の有力新聞が報じたように単純に「野党の地滑り的大勝利」ととらえてはならない。一九九〇年三月に約七〇年続いた人民革命党の一党独裁体

制を崩壊させたのが、ほかならぬ「民主連合」であったことをしっかり認識する必要があるからだ。

●共産主義の影響

一九九〇年三月の一党独裁体制の崩壊は、正確には「民主化運動」というより、旧ソ連からの「独立運動」といった方がいいだろう。複数政党制、市場経済の導入、そして九二年二月には憲法でマルクス・レーニン主義の放棄を謳ったものの、相も変わらぬ人民革命党の独裁が続いた。それは「民主化」という名を借りた新たな独裁というにふさわしかった。

「民主連合」が五〇議席を獲得し圧勝した背景には、ジャスライ人民革命党政権の本質を、特に与党の地盤であった農村部の有権者が見破ったことがあげられる。外国からの援助を食いものにするジャスライ内閣と政府高官の構図は、一党独裁当時の延長線上にあった。

また民主化によって、家畜の私有化をはじめ最も恩恵に浴したのは遊牧民であったが、それをもたらしただのがほかならぬ民主勢力であった。組織力のなかった野党は、これまでの選挙では広大な農村部でこうしたPR活動をするのが不可能に近かった。

民主勢力が完敗した一九九二年の新憲法下での最初の総選挙直後、野党第二党の社会民主党ビャンパジャルガ副党首にインタビューした際、彼はこんなことをいっていた。

「ひょっとしたら、旧ソ連より、モンゴルの方が共産主義を信じていた人びとが多かったのかもしれない、と最近強く感じます」

最新の国内外の情報を入手する条件が著しく劣悪な農村部ほど、彼の指摘は的を射ているに違いない。七〇年にわたって、繰り返し教え込まれてきた共産主義の理論を否定する新しい材料に乏しいからである。しかもこの間に培つちかわれてきた人民革命党の人脈・組織力が、県知事を頂点に地方行政の末端に至るまで、九〇年春の「民主化」後も温存されてきたのだから。

●ジャスライ政権の体質

では、なぜ人民革命党が歴史的敗北を喫したのだろうか。その原因をあえて一点に絞れば、「富の分配」の不公平にあったといっていられる。

つい数年前まで、モンゴルは世界で二番目に古い社会主義国家であった。社会主義は富の分配の公平を謳い文

句としてきた。ところが市場経済化の下、モンゴル社会

にモンゴル人がこれまで経験したことのない貧富の差が生じてきた。やがて人びとはそれが労働の「量」と「質」の差であることに気づいた。例えば首都ウランバートルを訪れると、街の中心部から郊外の団地まで、いたる所に畳二〜三枚分ほどのスペースの「トゥツ」と呼ばれるキヨスクを目にすることができると。キヨスクの数がふえればふえるほど、モンゴル人は営業時間を延長するなどして、利益拡大をはかることを学習した。日本のコンビニ並みに、二四時間営業のキヨスクも最近では珍しくなくなった。社会主義時代からの習慣で、夕方の六時に店が閉まっていたモンゴルでは、これは革命的な出来事だった。つまり労働「量」の改革である。

ところが、「それでも変だ」と人びとは考えるようになった。例えばジャスライ政権と癒着した特定の企業に、国有財産である金鉱をはじめとする地下資源の利権が、無償で払い下げられるという実態が明るみに出てきたのだ。最近では、政府がアメリカのコンサルタント会社との間で、地下資源などを共同開発する秘密協定を結んでいたことなどが発覚している。官僚が国有財産を私物化

しようとしていたのである。

このような官僚、あるいは閣僚の日常化した収賄疑惑が、法的に何ら追及されることがなかったところからも、人民革命党がいかに「民主化」に名を借りた、新たな独裁を続けていたかをうかがい知ることができる。その最たるものが一九九四年三月から四月にかけておこなわれた「ジャスライ首相退陣と収賄疑惑徹底解明」を求める三万人規模のデモとハンストだった。

ことの始まりは、S T A（秘密情報機関）の最高責任者、サンジャースルン氏が緊急記者会見を開き、「ジャスライ首相は、私と国家安全保障委員会のパートナー委員長を更迭し、ジャスライ内閣や国会議員が関与している収賄に関する書類を隠蔽する準備をおこなっている」と発表したことであつた。

二人は即刻身柄を拘束され、刑務所へ送り込まれた。

人びとにかつての「暗黒」の時代を思い出させる瞬間だった。次のジャスライ首相の発言などに、国民がその危惧を強く抱いたとしても不思議はない。「内閣を退陣させるのは国会の権限であつて、街頭や広場で決められることではない」。一党独裁当時の延長線上にある数の論

理の驕りである。

こうしたジャスライ人民革命党政権の利権体質が、同党の議席を七〇から二五に激減させたといっても過言ではない。モンゴルの国民は、ジャスライ政権が決して「民主化」されたものではなく、社会主義時代の延長線上にあることを見破ったのである。つまり政府と国民の間に「民主化」に対する意識の「ズレ」が拡大するばかりだったのだ。

●援助の姿勢

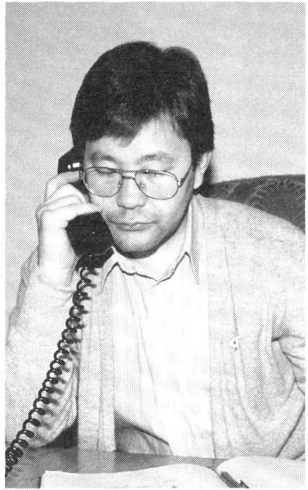
しかし日本はジャスライ政権の四年間に、対モンゴル最大の支援国として、毎年モンゴルの国家予算にほぼ匹敵する援助を続けていた。しかも対モンゴル援助の四〇%前後を占める日本の金はどう使われていたのか、日本が適切な報告を受けていたのかも疑わしい。富の分配の不公平の裏にはこのジャパン・マネーが大いに関係していたからだ。

ここ数年、電気のない生活を強いられてきた農村の実態が、今回の選挙で明らかになった。国家予算の五〇%以上が国家公務員の給与に消えていたこの国で、われわれ日本人の税金はどのように使われていたのだろうか。

自由選挙による一九九六年六月三〇日の民主勢力の歴史的勝利は同時に、外交の難しさを実感させるものとなった。選挙の立会人として、ベイカー米元国務長官が訪蒙し、注目を浴びたのである。アメリカはジャスライ政権だけでなく日本が無視してきた少数野党の民主勢力に特にこ入れをしていたのだ。この選挙の焦点は保守への牙城、農村部の票の行方にあった。九六年七月一八日に発足した新政権のトップ、民族民主党のエンフサイハーン首相は、九五年夏、私のインタビュに「党の幹部が農村の遊牧民と生活を共にしながらPR活動をおこなっている。モンゴルには約三〇〇のソム（日本の郡に相当する行政単位）があるが、民族民主党ではすでにその七〇%に入り込んでいる」と答えていた。

エンフサイハン氏（当時は大統領府官房長官）をはじめ、野党民主勢力の幹部はたびたびアメリカに招かれていた。首都ウランバートルの選挙区で初当選を果たしたホラン女史も、アメリカで教育を受けた若手のホープだ。

またドイツも、民族民主党と連合を組んだ社会民主党を、九〇年の民主化以来、資金的にバックアップしてきたことはつとに知られている。そのドイツの民間基金は、



“モンゴル民主化の星”といわれた
ゾリッグ議長。

モンゴルに民主主義を根付かせる教育プロジェクトを組織し、農村に入り、草の根運動を地道に積み重ねてきた。総選挙前の世論調査も、この民間基金が実施したもので、人民革命党の敗北を予測させる数字が出ていた。

ジャスライ政権は、こうした世論調査を選挙直前に禁じた。また、国営のメディア（テレビ、ラジオ、新聞）と政党の機関誌以外、一般のマスメディアが選挙に関する論評、インタビュー等を掲載することをいっさい禁止するといった、一党独裁当時とほとんど変わらない強権を発動した。それでも大敗したのだ。旧社会主義国での共産党復活の兆しは、もはやこの国には無縁のようである。

●民主化運動の歴史

ここでこれまでの民主化運動をふり返ってみたい。モンゴルの市民グループによる反政府デモとそれを組織した「モンゴル民主同盟」の名が最初に海外に打電されたのは、一九八九年一月一〇日。これは、モンゴル社会主義革命（一九二二年）以降、初の反政府デモといってもよかった。そのリーダーは当時、まだ二七歳の大学院生、サンジャスレンギーン・ゾリッグであった。

「民主同盟」は、学生、作家、芸術家、知識人等で構成されていた。ウランバートルで発行された唯一といってもいい民主化運動の足跡を詳細に記した『最新の歴史』には、「国際人権デーに、ウランバートル市にある青少年中央文化会館前広場に、約二〇〇人が集まり……」とある。モンゴルではこの日を、一連の民主化運動のスタート日と位置づけている。

「民主同盟」が当初要求していた二本の柱は、民主化と人権尊重だった。ゾリッグ議長は壇上から、「われわれが議論しているのは包括的ペレストロイカ（モンゴル語で「シネチレル」だ）「われわれはスターリン主義の亡霊にとりつかれたバトゥムンフ政権を打倒しなければならぬ」「官僚機構を廃止せよ」「言論、出版の自由を認め

よ」等と叫んだ。

翌一九九〇年に入って、一〇〇〇人規模のデモ・集會が何度か強行されたが、当局がデモに介入しなかったため、逮捕者は出なかった。一月二一日には、市の中心部、スフバートル広場に、今度は当局の集會・デモ禁止令を無視して、約七〇〇〇人の市民が集まった。氷点下三〇度の冬空の下、マイクを握ったゾリツグ議長は、集會・デモ禁止令を憲法違反だと非難するとともに、「あなた



スフバートル広場でのハンガーストライキ。約70年続いた人民革命党の一党独裁が崩壊する引き金となった。

方は自分の意志でここに集まってきた。これこそ真の民主的運動の第一歩だ」と呼び掛けた。この頃になると「民主同盟」は、モンゴル人民革命党の一党独裁の放棄、市場経済導入、ソ連との公正な関係等も要求していた。

●モンゴルの改革

これより先にモンゴルでも、ソ連のペレストロイカに呼応して、一九八七年から経済分野を手始めに、改革が開始されてはいた。特に基幹産業である牧畜業の停滞が指摘され、牧畜の生産請負制の実施や企業法の改正をおこなう等、党・政府主導の上からのペレストロイカが進められていた。しかし、旧態依然としたままで、ほとんどその効果は表れなかった。

翌八八年一二月、党中央委総会の前日に、党の機関紙「ウネン」は、現職の政治局員五人を名指しで批判する読者の手紙を掲載した。また、党の政策決定のプロセスを暴露したり、それまでタブーとされてきた民族の英雄チンギス・ハーンをはじめとする過去の歴史の見直しキャンペーン等を展開しはじめた。それにもかかわらず、党・政府内部からの政治刷新は遅々として進まなかった。それだけに「民主同盟」のデモ・集會に対する当局の柔

軟とも思える対応ぶりを考えると、若い人びとからの「突き上げ」を利用して節さえあった。実際「民主同盟」の要求を一部受け入れ、公用車の廃止、幹部専用商店の廃止などを決め、複数政党制導入についても議論が開始されていたのだ。

アメリカの中国・モンゴル研究家、故O・ラティモアは、かつてモンゴルを「ソ連の衛星国」と呼んだものだ。確かにモンゴルは、それまで強力なソ連の傘の下にあった。経済援助一つとっても、その約九〇％はソ連からのものだったといわれる。それだけにこの対ソ関係が、モンゴルのペレストロイカを推進するうえで、最大の足かせとなっていたことは明白だった。そうした時に始まった駐留ソ連軍のモンゴルからの撤退は、脱ソのまたとないいチャンスとなった。

●社会主義体制の崩壊

一九九〇年二月一八日、約七〇年間、人民革命党の一党独裁が続いたモンゴルで、初の野党「モンゴル民主党」が誕生した。これはゾリッグが率いる「民主同盟」を母体とする政党で、初代党首にE・バトゥール（三三歳）が選出された。その後、「社会民主党」等、続々と

新しい政党が誕生する。

そのバトゥールが、ガルサンドルジ、ドルリッグジャブとともに、三月七日、日中で氷点下一五度のスフバートル広場で、決死のハンガーストライキに入り、モンゴルの民主化運動は急展開する。このハンストは、モンゴルの国民に予想以上の共感を呼び起こすことに成功した。バトムンフ人民革命党書記長（兼任人民大会議幹部会議長＝国家元首）は、九日夜、ラジオ・テレビを通じて、特別声明を発表した。それは生命にかかわるハンストを中止させるために、「民主同盟」が要求している党中央委政治局員の総辞職を受け入れるというものであった。終わってみれば、わずか三日のハンストによる、あっけない幕切れであった。

これにはいくつかの原因が考えられる。すでに人民革命党内部で分裂の動きが顕在化していたこと。国民の間での流血の惨事は絶対に回避したいというバトムンフ書記長の強い信念があったこと。ルーマニアのチャウシェスク惨殺の場面がテレビで生々しく報道されたことも、党・政府に有形無形の圧力となったことは間違いない。もっとも忘れてはならないことは、モンゴル人である

こと、チンギス・ハーンの末裔であることの誇り、つまり民族意識の高揚がその根底にあったことだ。民族の自尊心を著しく汚され続けてきたソ連からの独立のまたとなないチャンスだったのである。それを権力とは無縁の若者たちがすべてお膳立てしてくれたのである。

三月一二日、党中央委員会臨時総会が開かれ、予定通りバトムンフ書記長を含む政治局員全員の総辞職を承認し、G・オチルバト書記長と四人の新しい政治局員を選出した。また三月二日にはモンゴル人民共和国の最高決定機関「人民大会議」が開催され、人民大会議議長にP・オチルバトを選出する一方、人民革命党の指導的役割を放棄し、複数政党制を認める憲法改正案を採択するとともに、新しい選挙法を承認した。新選挙法は、地域単位に代議員を一人選ぶ小選挙区制を導入、複数候補、秘密投票で実施すること等を決めた。

ソ連に次いで古いモンゴルの社会主義体制を倒すきっかけとなったハンストの指導者バトゥールは、「人民革命党は、マルクス・レーニン主義の放棄をすんなり受け入れたのか」との私の問いに、次のように答えた。

「ええ、想像していた以上にスムーズでした。党の内部

にも、ソ連の圧力から逃れたいとする勢力があったためです。私たちとの交渉に当たったバトムンフ書記長やビヤムバスレン副首相等も『この若者たちの運動を利用して、ソ連の傘から脱したい』という気持ちがあったはずで、です。ですから、私たちの運動が成功した最大の原因は、ソ連からの独立という共通の想いだったといって過言ではないでしょう。それに中国より先に民主化された国を作りた、という気持ちが強かった」

●連合政権による社会主義の放棄と市場経済化

ソ連からの離脱、独立に成功したものの、その後のモンゴルの民主化は遅々として進まなかった。その最大の原因は、かつての兄弟国、ソ連・東欧諸国では民主化後は一時的ではあれ、いずれも共産党が第一党から退いたが、モンゴルは状況が異なっていたことだろう。つまり一九九〇年三月の「民主化」後も、同じ党名のままのモンゴル人民革命党が依然として第一党のままだったのである。複数政党制導入後、初の自由選挙（一九九〇年七月）がおこなわれた直後こそ、野党・民主勢力と連合政権内閣を組んだが、現実には人民革命党が小選挙区制による人民大会議で八〇%以上を、比例代表制による人民

小会議でも六一%を占めていた。それが一院制になった一九九二年六月の総選挙では、人民革命党が議席を九三%も独占したのである。

一九九二年六月の総選挙後にスタートした人民革命党単独のジャスライ政権の腐敗と、その結果としての九六年六月の民主勢力の圧勝については、冒頭ですでに触れた通りである。ここでは九〇年七月の民主化後初の自由選挙後に成立した、人民革命党と野党・民主勢力の連合によるビヤムバスレン政権の評価について触れておこう。

この選挙で民主勢力が四〇%近くの得票率を獲得したことが、連合政権成立の直接の要因となった。首相のビヤムバスレンは、人民革命党内でも野党との協調路線を重視する「民主改革派」として知られていた。ビヤムバスレン首相は「これまで依存してきたソ連が経済的に行き詰まったことから、モンゴルも重大な経済危機に直面している」として、「市場経済システムを導入し、自立した国民経済を急いで確立する必要がある」と表明。これまでの社会主義計画経済を、一九九一年から三年間で市場経済に改めるというものであった。

その最大のプログラムは、国営企業の民営化。個人の

財産私有を認め、国有財産の三分の二をクーボン（株券）で国民に均等に分配したうえで、企業の民営化を進めるといったものだった。

ところが狙いこそ「国民の勤労意欲を高めるため」の市場経済化だったが、急激な価値観の変化は、勤労意欲を高めるどころか、逆に無政府主義的雰囲気を作り出してしまった。物価が急騰する中で、国民に分配されたクーボン（株券）は、わずか一年間で一〇分の一以下に目減りしてしまった。民営化された工場もほとんどがたちまち休業状態に追い込まれた。失業者が急増し、新たな社会問題が生じてきた。さらに一九九一年一月に発覚した中央銀行（旧国立銀行）の為替ディーリング損失スキヤンダルは、ビヤムバスレン政権を窮地に追い込む大きな要因となった。

政府の発表によると、海外での為替ディーリングで、二年間に八二四〇万ドルもの損失を出し、その相当部分を国の外貨準備から取り崩したうえ、金を担保に借金をして補填していたという。この損失額はモンゴルの国家財政規模の三分の一以上に相当する莫大なものであった。

●新憲法と民主化

確かにビヤムバスレン首相は、経済政策では手腕を発揮できなかったものの、一方で民主化運動の結晶ともいふべき新憲法を、人民大会議で成立させた。一九九二年二月一二日に発効された新憲法では、マルクス・レーニン主義の放棄、国名を「モンゴル人民共和国」から「モンゴル国」に変え、共産主義を象徴していた国旗と国章のデザインも一新。また大統領の直接選挙制、議会の一院制をはじめ、私有財産、市場経済の保障措置なども新憲法に盛り込まれた。

一九九二年六月、新憲法下での初の総選挙がおこなわれ、結果は共産党勢力、人民革命党の圧勝であった。七六議席中、じつに七一議席を独占（後に野党の繰り上げ当選により、七〇議席）。インフレ、物不足、治安の悪化……市場経済へ移行する過渡期の避けて通れない一時的市民生活の混乱を、人民革命党は「行き過ぎた民主化にある」として、目の前の国民の不満を民主勢力に転嫁したのである。

だが、一年後の九三年六月六日、モンゴル初の直接選挙による大統領選で、民主勢力のG・オチルバトが当選を果たした。かつて「モンゴルの民主化の星」と呼ばれ

た民族民主党のゾリッグ議員は、大統領選後、私にこう語った。「九二年六月の総選挙のとき、人民革命党は経済危機は民主勢力から生じたものだと言伝し、圧勝した。人民革命党は単独でジャスライ内閣を組閣し、一年以上経過したが、国民は経済危機が民主化によって生じたのではなく、すでに人民革命党の一党独裁時代に生じていたことを理解しはじめた。その具体例が今回の大統領選挙の結果です」と。

その三年後、一九九六年六月三〇日の総選挙で、ジャスライ政権が倒れたことは冒頭で触れた。それは一九二一年以来、実に七五年目にしての歴史的な政権交代の瞬間であった。九六年一月二二日の筆者との単独インタビューで、エンフサイハン首相は「二〇〇〇年の選挙で勝てる改革を進めていく」と力強く語り、同月二三日の単独インタビューでもオチルバト大統領は「エンフサイハン首相の手腕を高く評価する」とエールを送った。九〇年に人民革命党が一党独裁を放棄して以来進められてきたモンゴルの民主化は、名実ともに総仕上げの段階を迎えたといっていだらう。それを支えるのが、外国企業からの積極的投資であることは論を俟たない。